イスラムと西アフリカの物質文化

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>竹沢 尚一郎</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>国立民族学博物館研究報告別冊</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>その他のタイトル</td>
<td>イスラムを含む西アフリカの物質文化についての研究</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15021/00003644">http://doi.org/10.15021/00003644</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
III 西部アフリカ
イスラムと西アフリカの物質文化

竹沢 尚一郎*1

序

本稿の目的は2つある。1つは、西アフリカの物質文化にたいするイスラム文化の影響をさぐることであり、もう1つは、歴史資料としての物質文化の有効性を検討することである。

この2つの点について、最初におおよそその方向性をさだめておきたい。

まずイスラムの影響について。西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響と

* 九州大学文学部

1）本稿は、国立民族学博物館における共同研究会「アフリカ諸民族の技術志の整理と分析」（研究代表者：和田正平教授）での発表をもとにしたものであり、テーマそのものが和田教授のお勧めにしたものである。西アフリカの物質文化の問題について考えるうえで、この研究会での討議や、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の川田順造教授の問題意識の影響を大きく受けている。また本稿の材料となった資料の一部は、1985年度文部省科学研究費補助金（「＝ジェール川大港部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究」研究代表者川田順造東京外国語大学研教授）の給付を受けておこなわれた調査によって得られたものであり、取りまとめにさいしては、1985、1986年度の文部省奨励研究A（「西アフリカのイスラム化とそれに伴う社会変化の研究」）の補助を受けている。記して感謝したい。
では、2つの仕方が存在した。1つは外部から、すなわち北アフリカからサハラ砂漠をこえて伝えられた影響であり、もう1つは西アフリカ内部の、イスラム化した集団が手たした役割である。この2つのイスラム勢力はどうせずのこともながら密接にむすびついていたが、その影響の仕方は一種ではなかった。

622年のヒジュラからまもなくアラビア半岛の篤権を握ったアラブ人は、8世紀中頃までにはマグリブ全土を勢力下におき、現在のモロッコからイランにいたる広大な土地を1つの宗教圏、経済圏のうちに統合するにいたった。そうした過程で、マグリブの先住民族であったベルベル人は、スンニー派を信じているアラブ人に対抗するためにイバード派等のイスラムを受け入れたが、それらが西アフリカとの最初の接触をもったイスラム教徒であった [Lewicki 1964: 294sq.; 竹沢 1988: 22]。

このベルベル人にあってもアラブ人にとっても、サハラ交易の掌握は重要なことであったらしく、アラブ文献ではじめて西アフリカに言及している8世紀後半のアル・ファザーリー (al-Fazārī) の記録は、ガーナ帝国をはっきりと「金の国」と記している [Cuq 1975: 42]。さらに10世紀の末までには、ガーナのほかに、ガオ、アウダガスト、マリなどの西アフリカ各地の地名も登場するようになり、北アフリカ人の最大の関心事であった金の生産や交易の記述にくわえて、現地の宗教や風俗、王制、生活等についてのかなりくわしい記事もあらわれてくる [Cuq 1975: 48–78]。これはまさに北アフリカと西アフリカの交流の親密さを物語るものであるろう。

しかしながら、西アフリカと北アフリカとの交流がこの時代にはじまったと考えたら、明らかに間違いである。サハラ砂漠の岩壁に残る多くの戦車の絵が示しているように、サハラがまだ完全には乾燥化していなかった時代には、サハラは何本もの「戦車の道」によって幅横に走られていた。なかでもモロッコ南部とアウダガスト、ガーナを結ぶ西のルートと、チュニジア南部から、タッシリ・ナジールをへてガオにいたる東のルートの2本のルートの存在は、良く知られている [Mauny 1960: 428–429; Bovill 1978 (1958): 13–23, 図1参照]。このうちとくに西のルートは、隆起地の絶を縫って通っているため比較的雨量も多く、もっとも容易な道であり [Deviss 1972: 60], これを通っての交流は有史以前から続いていたと考えられている。

一方、サハラ以南の土地では、イスラムについての記述が文献にあらわれるのは10世紀以降である。10世紀末のアル・ムハラビー (al-Muhallabi) は、ガオの王がイスラム教徒であることを明言しているし [Cuq 1975: 77], 11世紀のアル・ベクリー (al-Bakri) の記録では、ガーナの王自身はイスラム教徒ではないにしても、家臣や商人の多くはイスラム教徒であること、そしてガーナ以外にも多くのイスラム教

534
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化

図1 中世初期の交通路（8-12 C）と西アフリカの大帝国

徒の町が存在していることが記されている [Cuq 1975: 96-103]。なかでも早魃に苦しんだマリの国では、王がイスラム導師の勧めにしたがってコーランの一章を読んだところ雨が降りだし、それ以来この国ではイスラムが国教として採用されたという出来事について書かれており [Cuq 1975: 102-103]、この時代には西アフリカでも相当のイスラム化の進展が見られたと考えることができるよう。

それゆえ、西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響を考えるには、いくつかの層の存在を考えることが必要である。その最下層には、有史以前からつづいていた北アフリカ文化の影響があり、これは前イスラムであるだけでなく、イスラム以前には北アフリカを統一した勢力が存在しなかったのだから、さまざまな経路をへて浸透していたのであろう。やがて8世紀になると、まずイスラム化したベルベル人、ついでアラブ勢力の手によって、イスラム文化の影響がまとまった形で入るようになる。しかしその影響は、北アフリカ勢力の実効的な西アフリカ支配が2度に限られる以上（1057年のムラービト朝のガーナ帝国の支配と、1591年のモロッコ軍によるガオ帝国の征服とニジェール川中流域の支配）、外部からの作用にとどまっていた。ついで10世紀を過ぎると、西アフリカ内部のイスラム交易者の影響がだいに優越していく。それは以下に見るように、地方のレベルですでに存在していた文化要素を開発したう
で他に伝えたり、あるいは北アフリカから受けとった要素を西アフリカに適合させ
うえで広く伝達したりすることによって、西アフリカのほぼ全域で社会と経済の変
革の動因となったのである。

つきに歴史の概念について見ておくことにしたい。西アフリカの歴史を問題にする
という場合にいくつかの立場が可能であろう。その1つは、文字に書かれた「歴史」
を例外的にしかもたなかった彼らの社会において、「歴史」がいかに語られ、生きら
れてきたかを検討することであり、それをつうじてわたしたちが自明のものとしてい
る「歴史」概念そのものを問い直すことである。こうした立場はたしかに重要な問題
提起を含んでいるが2)，わたしたちがここで問題にしようとしていることとは異なっ
ている。わたしたちがここで試みたいのは、一般的な意味での歴史、編年体を中心と
する歴史の再構成に、物質文化の研究がどれだけ有効かを考えることである。

そうした意味での黒人アフリカの歴史研究は、周知のように大きな困難を抱えてい
る。西欧諸国の植民地経営が本格化する19世紀以前の、文字記録や遺跡等の歴史資料
の乏しさに由来する困難である。

西アフリカの過去を再構成するのに有用な歴史資料は、以下のいくつかのカテゴリー
に分けることができる。

1. イスラムの地理家、歴史家、旅行家の書いた資料。8世紀から16世紀にかけて
書かれたこれらの資料は、それが記載している事項や出来事と同時代のものであ
るという点で大きな価値をもっている。しかし一方で、これらの記録の著者は、
一度も西アフリカを訪れたことがないか、一度しか訪れたことのない人びとであ
り、その利用については十分な注意が必要である。

2. ヨーロッパの交換者、植民者が残した記録。15世紀の後半から、まずポルトガル
が、ついで17世紀からイギリス、オランダ、フランスなどの資料があらわれてく
る。しかしこの種の資料についても、1と同じ長所と欠陥が認められる。

3. イスラム化した西アフリカの人びとがアラビア語を用いて記した歴史書。この
資料は、現地で書かれたものであるという点で第一級の価値をもっている。しか
しその地域が限られていること、資料批判が十分でなく、歴史と神話が渾然とし
ていることなどの点に問題を残している。

4. 口頭伝承。文字をもたない社会において唯一の「歴史」として機能してきたも
のである。しかしこれもまた、すべての社会が同じほどの深さの伝承をもつわけ
ではないこと、絶対年代の測定が困難なことなどの問題をもっている。

2）この問題は、わが国ではとくに川田馥造によって論じられている [川田 1976, 1988]。
5. 考古学調査。専門家による発掘調査は近年とくに盛んになっており、その中から古ジェノネの調査など、これまでの歴史認識をくつがえしたものもあらわれてきた。しかし全体にアフリカの調査は立ち遅れているのが現状である。

これらの資料は、以上のようにさまざまな欠陥をかかえ、しかもその量は絶対的に不足している。そうであれば、アフリカの過去を再構成するためには、これらの資料を補ってくれる何かが必要なことは明らかだろう。このとき物質文化こそは、現在のうちに過去を内包した資料であるという点で、過去の再構成に大きく貢献しうるものであると思われるのである。

わたしはすでに別箇所で、アフリカ原産の稲オリザ・グラベリマ（*Oryza glaberrima*）を手掛かりに、これまで取りあげられることのなかったアフリカ史の2、3の事柄について考察してきた [竹沢 1984]。ここではこの動きの継続・発展として、いくつかの項目を加えながら検討していくことにしたい。

ここでとりあげるのは、つぎの4つの事項である。
1. アフリカの人びとの生活の基盤となった、グラベリマ稲をはじめとするいくつかの栽培作物の起源と展開。
2. イスラムの禁じるアルコールにかわる嗜好品として広く愛され、重要な交易品とされたコーラナッツとその交易集団。
3. アフリカ独特の幅の狭い織機と、それによって織られた綿と毛の2種の織物の起源と分布。
4. 殺物や奴隷の輸送をしない、それによって中世の大帝国の経済を支えたしばり舟の種類と製造。

以下にこの順で見ていくことにしたい。

1. 稲その他の栽培作物の起源

1) 起 源

サハラ以南の農業の起源についてはこれまで諸説があったが、今日では他からの影響を含まない独立の起源を唱える研究者が多い。その独立起源説の根拠としてあげられているのは、以下の事実である。1. サハラ以南の農業は、中東に起源をもついわゆる「地中海農耕文化」の主要な作物である大麦や小麦等を1つも受けとっていないこと [Murdock 1959: 64–66]。2. サハラ以南の土地でトージンピエやソルガムなど多くの作物の栽培が始始されたことが、野生種の存在によって確かに


一方，サバンナの農業が開始された地域についても，以下のようにさまざまな説がある。マードックはそれをニジェール川上流域地帯においてが，その理由は，この

図 2 ボルテールによるアフリカの栽培作物の起源地 [Portères 1950: 505]


2) グラベリマ稈とその分布

サバンナ起源の作物のうちでも、わたしたち日本人に関心の深い作物にグラベリマ稈 (Oryza graberrima) がある。この種の起源地とその後の伝播についてはポルテールのくわしい研究がある。かれの研究についてはすでに別の箇所で紹介したことがあるので [竹沢 1984]、ここでは簡単に見ておくことにしたい。
ポルテールらによると、アフリカには2種の野生稲が存在している。1つは多年性のパルティ稲（O. hartii）であり、もう1つは一年性のプレヴィリギュラータ稲（O. breviligulata）である。前者は熱帯アフリカに広くみられるのにたいし、後者の分布は西アフリカに限られ、グラベリマ稲の分布とほぼ重なっている（図4参照）。このことからグラベリマ稲の直接の先祖はプレヴィリギュラータ稲と考えられている[Chevalier 1932: 1026; Portères 1955: 833-848]。また栽培の開始された地域については、ポルテールはニジェール川流域の、ニジェール川内陸三角洲と呼ばれる地域を挙げているが（図4で第1次センターとして示されている箇所）、その理由として、この地域に稲の種類が多数見られること、そしてその多くが遺伝学的にみて優勢形質をもっていることをあげている [Portères 1950: 490]。

さらにその伝播について、かれは以下のよう考察をおくている。現在この地に居住し、広く人口に膿着しているmalo, maro, manoの名称で稲を呼んでいるのはマンデ系の人びとであるが、かれらが稲を栽培化したと考えることはできない。と

---

4) グラベリマ稲がプレヴィリギュラータ稲から栽培化されたとする見解について、のちにChevalier は否定的だった。かれによれば、前者は芒が短く、穂果が細く、稈が褐色であるのにたいし、後者は芒が長くて、穂果が大きく、稈が白色であるというくらや、大きな形態上の相違をみせているためである [Chevalier 1937: 413-415]。内陸三角洲の農民たちは田の雑草として2つの野生稲の違いをよく知っており、カルカの入いとパルティ稲をレーカプレヴィリギュラータ稲をブガとよんで区別している。かれらは「ブガが出てきた田を変えなくてはならない」といえる。プレヴィリギュラータ稲を、多年性の雑草であるパルティ稲と栽培稲であるグラベリマ稲との混穂とみなしている。またグラベリマ稲とプレヴィリギュラータ稲の分布がほぼ一致する点など、グラベリマ稲が一年性のプレヴィリギュラータ稲からではなく、多年性のパルティ稲から栽培化された可能性も考えられる。なおChang は、グラベリマ稲がプレヴィリギュラータ稲からではなく、芒の長いロンギスタマニータ稲（Oryza longistaminata）から始まったと考えている [Chang 1976: 98-104]。
表1 西アフリカの穀の名称と栽培化の歴史

<table>
<thead>
<tr>
<th>部族集団（地域）</th>
<th>名称</th>
<th>意味</th>
<th>栽培化の時期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>alo, aro, ano</td>
<td>「食物」一般をさす</td>
<td>栽培／採集の区別なし</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>ma-lo, ma-ro, ma-no</td>
<td>「米」「シロクビイ」など、ある「定まった種類の穀物」をさす</td>
<td>穀物の栽培開始、しかしご米はまだ</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>ma-lo, ma-ro, ma-no</td>
<td>「米」を示す、パンツーの「ma-」が残ったもの</td>
<td>栽培開始、とくに稲作儀礼さかん</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>malo, maro, mano</td>
<td>「米」、名称クラスなし、maro, maloを語幹としてうけとる</td>
<td>セミ・パンツーから稲をうけとって栽培さかん</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>ma, mo, mu</td>
<td>「米」、malo, manoの一部を語幹としてうけとる</td>
<td>比較的新しい</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>pa-mano, e-mano, i-molu</td>
<td>「米」、マンデ系から mano 等をうけとり、それに接頭語をつける</td>
<td>新しい</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>cruz(アラブ), arroz (ポルトガル)の名称を用いる</td>
<td>「米」ヨーロッパ人、アラブ人がもってきた</td>
<td>近年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

[Portères 1959: 189-233] にもとづいて作図

いうのも、かれらは稲を作にむすびつく儀礼や神話をもっていなかったからであり、かれらがこの名称を稲とともに他から受けとったことは十分推察できるからである。ポルテールによれば、稲作物を開始した集団としてももっと可能性の高いのは、ギニアからシェラレオネにかけての、バガ、テムネ、ランドマなどの西大西洋語族（ポルテールのいう「セミ・パンツー系」）の人びとである。そのもとは、かれらのもとではすでに稲がma-lo, ma-roなどの名称で呼ばれるようになったからであり、かれらは稲作とそれに結びついた儀礼にとくに熱心だからである（表1）。

なおポルテールによれば、この西大西洋語族の人びとはニジェール川中流域で稲作を開始したが、のちにマンデ系の人びとに押されて南下していき、稲をもって現在の居住地であるギニア山脈に移り住んだ。そしてマンデ系の人びとがかれらから稲を受けとれてこれをさらに周辺のソングアイやジョロなど、現在にいたるまで稲作に熱心な諸民族に伝えたというのである [Portères 1959: 189-233]。

このポルテールの整理をもとに、西アフリカの主要な民族における稲の名称の分布を図示したのが図5である。ここで興味深いのは、malo, maro系の名称がきわめて広い範囲におよんでいること、そしてハウサーカヌリのsinkafa系の名称と「棲み分け」していることである。このハウサ社会や、図で1で示されているアジャンティ社会
にマンデの影響が及んだのは14世紀と考えられているが [竹沢 1988: 23-24]，かれらの稲の名称はマンデのそれとはことになっている。これらの社会はその時期までに，すでに栽培作物としての稲を知っていたのであろう。


3）稲の栽培様式

古くから稲作に従事していた西アフリカの諸民族のあいだには，大きく分けて3つの稲の栽培の様式が存在した。ニジェール川流域のウキネ栽培と，ガンビア川から
ギニア湾岸にかけての灌漑水田、そしてギニア山地の陸稲である [DRESCH 1949: 295-312] で、ここでは筆者の調査地であるミジョール川内陸三角洲の伝統的な稲作について、かんたんに見ておくことにしたい（図6）。

この地方で稲作に従事しているのは、マルカと呼ばれる集団と、牛牧民であるフルベのかつての農耕奴隷であるリマイベと呼ばれる人びとである。かれらは、この地方の中央を流れるミジョール川をはさんで、おおよそ北にリマイベ、南にマルカというぐあいに積み重ねている。またこの分布は、ほぼ水深の深い水田（リマイベ）と比較的浅い水田（マルカ）の違いに対応している。

この地方の年平均降水量は500mm 前後でしかなく、天水にたっては稲作をおこなうことは不可能である。そのため、稲作はもっともミジョール川の自然氾濫水に依存しておこなわれている。水田は一般に深い水田と浅い水田とに分けられており、両

写真1 マルカの稲の刈入れ (Dia村 1981.11.10)

者のあいだには1m程度の違いがある。そのため、深い水田では氾濫水を受けるのが浅い水田より2-3週間早く、また水のひくのも1月程度遅れる（図7）。一般に発生の穂の方が穂もよく、収量も多いため、こちらのほうが好んで植えられるが、そうするとかなりの増水をかぶる危険もある。そのため、一軒の農家が浅い水田と深い水田を含む何枚かの田に、いく種類の稲をまくことが一般的である。

図7 ニジェール川内陸三角州における降水量、水位と稲作カレンダー
写真2 リライペの稲の刈入れ（Toguéré-Koumbé村 1986.10.31）

写真3 リライペの刈入れ（収穫した稲を舟で村へ運ぶ）
（Toguéré-Koumbé村 1986.10.31）

る。その結果、大きな危険を避けることはできても、単位面積あたりの平均収量はか
ぎられたものになっている。

図7には、マルカ農民の平均的な稲作のカレンダーが記されている。図に見られる
ように、稲刈りがおわりるとすぐに田の鋤入れがおこなわれ、6月の最初の雨とともに深
水田では種播きがばらまきでおこなわれる。ついで浅い水田での種播き、除草とつづ
き、深水田ではしばしば2度目の除草がおこなわれる。これは胸まで水につかりなが
らおこなう大変つらい作業である。浅い水田から水がひきはじめる11月頃、この田で
稲刈りがおこなわれ、そして12月から1月にかけて深水田でも稲刈りがおこなわれて、
写真4 マルカの脱穀、収穫された穀が少量のばあいには、
その場でざらを広げて脱穀がおこなわれる。
（Dia 村 1981.11.10）

一年の農業の暦が閉じられるのである。

この地方の農民を見て感心するのは、その勤労意欲の高さであり、知識の正確さである。この地方の農民は、ウキイネと乾燥に強い種、早生の種と晚生の種、粒の大小、形態、収量等において穀をこと細かに分類しており、田の浅深、その年の降水量、
氾濫水の高低等の予想にしたがってそれらを植えわけている9)。しかもかれらの労働
は、長期間の浸入れ、水につかったのに除草、収穫の時期には猪をぶせつくる1ヶ月ほど水田のまわりで見張りをして過ごすことなど、他のトージンピエやソルガム等
の栽培にくらべると大変な労力を必要とする。しかしこれらは穀の栽培に強い愛着をもち、米の御飯に固執し、またさまざまな料理法も知っている。こうした考え
あわせると、かれらのもとで穀の栽培が長い歴史をもっていることが容易に推測されるのである7)。

ところで、このニジェール川内陸三角洲は、西アフリカの穀の起源の地とされる土

6) フランスの農学者ヴィジェルは、ニジェール川中流域で栽培されているグラベリマ種の穀を
55種あげ、その1つ1つについて名前と、収量、粒の大小、早生と晚生の区別等をしらにしてい
る[VIGUIER 1938: 52-71]。また LAUZANNE は、ガオの付近で栽培されている穀の名称を53
あげている [LAUZANNE 1920: 43]。

7) こうしたマルカ集団の手による洗練された栽培や、その下流のさらに発達したソンライの栽培
は、1966-68年、72-74年、82-84年とつづいた旱魃により頻繁な打撃をうけた。とくに82-
84年のそれは前代未聞のものであり、これにセレンゲやマルカのダムの建設等の「開発」が
くわわって、ニジェール川の水位は大きく変化するにいたった。現在ではマルカやソン
ライの水田にほとんど氾濫水が届かなくなっており、1981年に調査をおこなった何箇所かの水
田の多くは、1985年の時点では完全に干上がってしまい、もはや耕作はおこなわれなくなってい
た。
地であった。そうであれば、この土地の米作民であるマルカやリマイベが、西アフリカで最初に稲の栽培を始めたのであろうか。

ところが奇妙なことに、このマルカという集団は、記録にあらわれる西アフリカ最古の王国であり、11世紀まで繁栄したガーナ帝国の支配層の末裔を自称し、サヘル地域の乾燥化にともなって南下してこの地にいたったと称している。かれらはがんらい米作民ではなかったし、その言語は現在では漁獣民ボゾのそれに吸収されているが、そこでは稲は duga ないし dua とよばれ、西アフリカに広く流通する malo 系の名称ではない。しかもその dua という名称は、それぞれ「食べる」、「食糧」をあらわす dun, duun と未文化なのである [竹沢 1984: 94]。また、もう一方のリマイベにしても、もとフルペの農耕奴隷であったかからの前身が何であったかについてはまったく知られていない。15世紀頃に始まるフルペ人の移動にともなって形成された農耕奴隷集団としてのリマイベが稲の栽培化を開始したと考えることは、それゆえ不可能なのである。

稲の栽培化にかんするわたしの仮説はこうである。現在マルカとよばれる集団のなかで、ノノと呼ばれる人びとにかんする伝承がわずかに存在する [MONTIEL 1971 (1932): 30–36; GALLAIS 1967: 79–81]。おそらくこのノノというのは、ポルトガルのいうセミ・バンツー系の人びといえどであり、かれらが最初にこの土地で稲作を開始したのであろう。ところがかれらは、のちに農業を知らない漁獣民ボゾに言語的に吸収されて稲の固有の名称をうしない、さらに11世紀までにガーナ帝国から南下したマルカ集団によって交易センターであるジェンネやジャ付近のかれらは吸収された。その後でフルペがこの土地に勢力を拡大するにいたって、マルカの勢力の外にあたったかれらを農耕奴隷として取りこんでリマイベと呼んだのではないだろうか。

的にも起源においてもいかなる共通性ももっていない。その意味で、西アフリカのなかでかれらだけがこのように発達した稲作の様式をもつという事実は、ひとつの謎として残るのである。さて、これらの社会では、稲はソンライ語では moo、セヌフォ語では mo, ma、ジョラ-バカ語では emano と呼ばれている [PORTÈRES 1950: 193-194]。ボルテールの表でいえば5ないし6に相当するわけである。このカテゴリーに属する社会は、かれの解釈ではかなりのちの時代にマンデから稲作を受けとったのであっ。とすれば、これから3つの社会は、マンデの土地での稲作が高度な技術をとるようになったのに、それを受けとった（あるばあいにはさらに発展させた）と解釈することはできないであろうか。

4）歴史のなかの稲

西アフリカの歴史のなかで、稲はアジアにおいてと同じようにきわめて大きな役割をなってきた。西アフリカに巨大な竜種を確立したマリ帝国とソングライ帝国は、いずれも米を主食とする人びとが建設した国家なのである。

いくつかの記録をもってみてみよう。たとえば1352年にマリの首都を訪れれたイブン・バッタ（Ibn Batštûta）は、その町の役人から米とフォニオ、牡羊、牛を贈られたことを記しているが、そのほかの作物については何もふれていない [Cuoq 1975: 298-301]。それより早く、1349年に記録を残しているアル・ウマリ（al-'Umari）は、つぎのように書いている。「（マリの首都の住人の）おもな食べ物は米とフォニオであり、他にソルガムや、量は少ないが小麦がある。ソルガムは人間が食べるものであるが、どうに馬や他の家畜の飼料でもある」[Cuoq 1975: 266]。一方、ガオについてイブン・バッタは、「これはナイル（ニジェール川のこと）のほとりにある大きな町で、スーダンのなかでもっとも美しく、もっとも豊かな町である。ここには、米、牛乳、鶏、魚がたくさんある。」と書き [Cuoq 1975: 316]。また16世紀の初めに2度にわたってサハラ以南の土地を訪れたレオ・アフリカヌスは、ガオの住人の食べ物について、「パンと肉はまことに豊富であるが、酒と果物はない。メロン、キュウリ、ウリは沢山あり、米はすごく沢山ある」と記している [LéON L'AfrICAIN 1956 (1926): 471]。

あるいはこのような引用のしかたは恣意的に見えるかもしれない。そこで、イスラムの文献にあらわれる中世の西アフリカの食物にかんする記事を、すべてぬきだして
表2 中世の西アフリカの主要作物

<table>
<thead>
<tr>
<th>世紀</th>
<th>記録者</th>
<th>テクレール</th>
<th>フーNA</th>
<th>マリ</th>
<th>ジェンネ</th>
<th>ガオ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10〜11</td>
<td>アル・バクリ等</td>
<td>ソルガム</td>
<td>トージンピエ、小麦、ソルガム、マメ</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>アル・イドリシ等</td>
<td>ソルガム、スイカ</td>
<td>トージンピエ、小麦</td>
<td>—</td>
<td>米、ソルガム</td>
<td>米、マメ、ゴマ、サトウキビ</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>アル・ウマリ</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>米、フォニオ、ソルガム、マメ、ヤムイモ</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>イブン・バツータ</td>
<td>—</td>
<td>トージンピエ、スイカ（少量）</td>
<td>米、フォニオ、ヤムイモ</td>
<td>米、フォニオ、トージンピエ</td>
<td>米、スイカ</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>レオ・アフリカヌス</td>
<td>—</td>
<td>トージンピエ、ソルガム（少量）</td>
<td>「穀物」</td>
<td>米、大麦</td>
<td>米、スイカ</td>
</tr>
</tbody>
</table>


表中の地域にかんしては図1を参照のこと。

表にしてみた。それが表2である。これを見れば、西アフリカの食物にかんするかぎり、北アフリカの知識はほとんど誤差を含まない、正確なものであったことがわかる。そしてここから、西アフリカの中世の大帝国を支えていたのが、主要作物としての稲の栽培であったことが確認されるのである。

稲はなぜそのような役割をはたことができたのだろうか。それには2つの理由があったように思われる。稲そのものがもつ他に秀でた経済的価値と、稲作に結びつけられた社会-政治的状況である。まず前者について、フランスの地理学者ドレッシュは、他の作物にたいする稲の経済的利点をつきのようにまとめている。1. 単位面積あたりの収穫が、トージンピエやソルガムなど、熱帯アフリカで好んで栽培されている作物より多いこと。2. 沿岸域では唯一可能な作物であるとうじに、毎年栽培が可能なこと。3. 味が他の穀物より評価され、高い商品価値ももっていること。4. 他の作物より長期の保存によく、遠距離の輸送にも適していること。5. 沿岸域の灌漑稲作をはじめとして、一般に稲作は他の穀物より多くの労働力を必要とし、それが政治的・経済的安定につながったこと [Dresch 1949: 296-297]。稲の栽培が政治的・経済的安定と発展に寄与した点について、かれのこの解釈はおおむね的を射たものといえよう。
稲作と中世の大帝国との関連については、もう一つの要因があった。それは奴隷による農業生産ということである。マリ帝国を支配したマリケは、最初は現在の土地よりも北の地方に居住していたといわれ [Monteil 1930: 8]、もともとかれらのもともどで稲の栽培はあまりおこなわれていなかったようである。そのことは、かれらのもともどで稲作にかかわる神話や儀礼がほとんど存在しないこと [Dieterlen 1955: 43 sq.]8、そしてマリ帝国の中心地であったマンデの地以外では稲作が急におこわれていなかったこと9に示されている。ところが、のちにサヘル地帯の乾燥化にともなって南下したかれらは、ニジェール川流域で多くの稲作民（おそらくポルチールのようセミ・バンツー民）を見つけたようである。この人びとにたいし、マリケは吸収・同化という方法をとらなかった。おそらく農業形態の相違やそれと関連する言語・文化の相違が、かれらを奴隷として取り込むという形態をとらせたのである。このような過程をへて、17世紀にトンブクターで書かれた歴史書が明言しているように、奴隷制の基礎をおく国家が西アフリカにはじめて誕生したのである [Tarikh el-Fettach: 107-108]10。

マリ帝国のつきのガオ帝国になると、奴隷による生産はさらに発展することになった。ガオの王は戦争をくりかえし、そこで捕らえた奴隷は北アフリカに輸出したほか、ニジェール川流域の穀倉地帯に連れてきて農業奴隷として活用した [Tarikh el-Fettach: 214-215]。また王が功績のあった臣下にあたえる財も、奴隷をふくんだ一定の領土であった [Tarikh el-Fettach: 110, 211]。ガオ帝国においてこのように奴隷制が強化されたのは、おそらく軍事力の増強と、農業の発展による生産力の向上があったのである。経済学的観点から見たとき奴隷制に課せられた課題とは、

8) マリ帝国の中核民族であったマリケのもとで、最初に栽培された植物として高い神話的および儀礼的価値をもたれているのはフォニオであり [Dieterlen 1955: 60-64]、穀物に「Faro（水の精霊）とともに地上にいたた水（ニジェール川）のなかに最初に生えたもの」といわれるにすぎない [Dieterlen 1955: 69]。かれらのもとでは穀物栽培化され、野生のままにとどまっていたのであろうか。

9) ガンビア川流域のマリケ社会では、稲の栽培が女の仕事とされているという事実に示されているように、マリケの農業の中心をなすのは、トージンピエ、ソルガム、フォニオ等の穀物であり、稲は好んで栽培される作物ではない [Quinn 1972: 6-7]。稲作物に熱心であるセミ・バンツー系社会からみた場合、マリケ社会との違いは、より稲作を中心としているか「雑穀」栽培であるかの違いとして認識されているのである [Paulme 1970 (1954): 9]。

10) マリ帝国の奴隷をもいた農業生産については [竹沢 1984: 103-104] を見よ。ガオの軍隊は15世紀の前半にマリ軍を破り、後者の所有していた24の「奴隷部族」を獲得したが、これがはじめてガオに奴隷制の導入された契機であったとされている [Tarikh el-Fettach: 107]。この24の「奴隷部族」とは、農業奴隷のほかに、鍛冶屋、漁民、馬丁、大工、皮箱工師といった専門的な職業集団もふくんでいた [Tarikh el-Fettach: 20-21]。
奴隷じしんの生存とその主人の生計を維持するだけの高い生産力をもつうかという点にある。しかしこのことはアフリカの伝統的な粗放な農業によっては困難であった。そこでガオ帝国のように、稲作等によって高い生産性を実現した社会だけが、奴隷制に基礎をおく中央集権的な国家を成立させたのである。

中世の西アフリカの大帝国の経済的基盤については、これまで金その他の交易のみが強調される傾向があった。その結果、これらの国家は真の経済的発展を経験せず、金や奴隷等の内部の資源を輸出することによってのみ栄えた、「略奪的経済にもとづいた国家である」と主張されてきた [Coquery-Vidrovitch 1969: 77; Deviss 1972: 369]。しかしながら、こうした解釈はいちじるしく公平を欠いているといわざるをえない。それは、中世の西アフリカで実現された経済的発展、とくに農業や手工業等の分野で見られた生産技術の発展と生産様式の根本的な変化、そしてわたしたちが以下の章で見るような、西アフリカ全土を結びあわせる交易の進展とそれによって広範囲にもたらされた文化的および社会的な革新を、見おとす危険性があるからである。

5）稲その他の栽培作物にたいするイスラムの影響

北アフリカ等のイスラム世界は、西アフリカの農業文化にいかなる影響をもたらしたのであろうか。しかし西アフリカのなかでも、トンブクツーヤガオといった北アフリカとの交流がとくに深かった地域では、15世紀のレオ・アフリカヌスが書いているように、古くから小麦の栽培が導入され、パンも焼かれていた [Léon L'Africain


1956 (1526): 465, 471]。しかしそれいがいの点では、西アフリカはむしろ影響を与える側だったようである。

たとえばソルガムは、西アフリカの主要な作物の1つであるとどうに、世界各地で生産され、今日では世界の4大作物の1つにかぞえられるほどである。その品種は今や何千とあるが、その起源は唯一の野生種 Sorghum bicolor にあったこと、そしてその栽培化がおこなわれたのがサハラの南縁地帯であったことについて、多くの研究者の見解は一致している [Harlan and Stehler 1976: 466-477; Doggett 1976: 112-117]（図2・3参照）。これはその後インドへ伝えられ、高収量のドゥラ種 S. durra を生んだ。インドで発掘された最古のソルガム（ドゥラ種）は BC 2000-1500年頃のものであり、ソルガムの伝播がかなり古い時期におこなわれたことを物語っている [Norman et al. 1984: 121]。さらにこれは中国へ伝えられてコーリャンを生み、またイスラム世界へ伝えられて広く栽培されたのもこのドゥラ種であった。


もう1つのアフリカに特徴的な栽培種はフォニオ Digitaria exilis がある。これがアラブの文献にはじめて登場するのは14世紀のイブン・バータとアル・ウマリーの記録であり、マリ帝国の主要な食物として描かれている。しかもそこではfuni と西アフリカの名称でよばれており [Cuq 1975: 266, 298]、それ以前にはイスラム

13) マリのバンジャラ高地にすむドゴンの宗教世界において、作物の起源にかんする伝承と高い儀礼的価値が与えられているのは、グラベリマ穀、ソルガム、ゴマ、そしてつぎにみるフォニオであり、トージンピエではない [竹沢 1987: 116]。これらの作物はトージンピエにくらべるとより潤湿な気候を好みるものであり、トージンピエの栽培がのちにつくくおれられたことを推測させるものである。トージンピエの起源地は、おそらく他の西アフリカ起源の作物より乾燥化のはげしい地帯、Chevalier のいうように現在のサハラ砂漠の地帯にあったのだろう [Chevalier 1938: 315]。
世界でこれが知られていなかったことを物語っている。

ボルテールによると、フォニオの栽培は西アフリカに限られており、とりわけニジェール川上流地帯で栽培種の数がもっとも多い（図8）。またその名称を見ていくと、ほとんどの地域で funio か fundi のいずれかでよばれている。このうちfuは「もの」をあらわし、nio および di は「食物」を意味する。したがって funio と fundi はいずれも「食物」「食べる物」の意味であり、これがこの地方でももっとも古く栽培化された作物であることを示唆しているとされる [Portères 1976: 419-423]。西アフリカの各地、とくにマンデ集団の本拠地でもあったニジェール川上流地帯にはフォニオにまつわる神話がひろく存在し、それがもっとも早く栽培化された作物であるという伝承も存在する [Dieterlen 1955: 43, 54-55; Griaule et Dieterlen 1965: 106 sq.], その意味でも、ボルテールの解釈は的を射ているといえよう。
2. コーラナッツとその交易

1) コーラナッツの栽培と価値

つぎに、古くから西アフリカの主要な交易品であったコーラナッツについて、見ていくことにしたい。

コーラナッツは人間の神経系を刺激するさまざまな成分をふくんでおり、またそのようなものとして高い価値を与えられてきた。コーラナッツの成分としては、カフェインやテープロミン、コライン等がふくまれが [FRANÇOIS 1918: 119]、それらは大脳皮質に作用して精神・神経機能を高揚させるとどうに、気管支の拡張や、心筋の収縮力の増強をもたらす。これらの刺激は、コーヒーをはじめ他の刺激物に共通するところがあるが、コーラナッツは面倒な準備を必要としないという点でまぎれている。

コーラナッツのこのような作用に着目して、それを清涼飲料水として商品化した製品が現在世界中で愛飲されていることを考えれば、その効果の大きさは理解できるであろう。

とはいえ、コーラナッツがかくもピュアリティーを獲得するにいたったのは
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化


コーラナッツの起源が熱帯アフリカにあるのは、上のことだから明らかである。現在栽培されているコーラナッツは世界に約40種類あるといわれているが、そのうち重要なものは，Cola nitida, C. acuminata, C. verticillata, C. anomala の4種である [Lovejoy 1980: 98]。これらの栽培地は、図9に見られるように西アフリカから中央アフリカの熱帯雨林気候帯にかき出されており、このなかでもときに C. nitida が高い商品価値が与えられてきた。

とはいえ、西アフリカのどこでもコーラナッツに一様な価値が与えられてきたわけではない。人びとの嗜好には大きな地域-気候的変差があり、コーラナッツの栽培される熱帯地域と、交易によってしかそれを入手できない北のサバンナ地帯とは、大きな価値の相違が存在するのである。たとえば西アフリカのギニア山地東部についていえば、コーラナッツの栽培のおこなわれているクル系（アシャンティ、バウレ等）の民よとのあいだでは、それはほとんど消費者でされていない。また、その栽培にもっとも熱心であるキシ、テムネなどの西大西洋語族や、ダンやガルなどの南マンデ系でもその評価は低く、ときおり消費されるにすぎない。それにたいし、コーラナッツの栽培の不可能な北マンデ系社会や、ソンライ、ハウサなどのサバンナの住人のある時では高い儀礼的・社会的価値を与えられているのである [Person 1968: 14]14

[14] 14世紀のアル・ウマリーの記録に、「黒人だけが食べる、酸っぱくて嫌な味の果実がある」という記述があり [Cuq 1975: 268]。西アフリカ史家 Mauny はこれをコーラナッツにかんするアラブ世界の最初の記述とみなしている [Mauny 1961: 249]。また、西アフリカに滞在していたイタリア人商人の話をもとに1574年にナポリで出版された地理書では、ハウサのカノノの見聞として、コーラナッツとおぼしき果実についてつぎのような記事がある。「ヌイル川のほとりで黒人が sorî (干し) とよぶ木が生えており、それは木の形についても、その実についても（その皮をなぎとする）果よく似ている。その実は黄色か赤で、最初は苦いが、喫んでいくうちに他のどの果物よりも甘く、甘くなっていく。それは黒人の王だけでなく、パルパリー（アラブ人）によっても大変評価されている。それらは大変高価なものだからである。Vincenzo Matteo 氏は Fes の王にこれを贈ったところ、王はそれを高価な宝石のように評価した」 [Lange et Berthoud 1972: 339-341]。この記録を見ると、16世紀の溜中になっても北アフリカにはコーラナッツはほとんど入っていなかったようである。
サバンナ地帯におけるこのように高い評価は何によっているのだろうか。2つの理由があるように思われる。1つは、それがサバンナ地方では生産されず、しかもその輸送コストが高くつくという事実からくる稀少性である。コーラナッツは熱や乾燥に弱く、それを運搬するにあたっては木の葉で厳重にくるまったようで、たえずその上から水分をかけて、つねに湿り気をおびるようにしなくてはならない。しかもその輸送は迅速でなくてはならず、交通路と輸送手段の未発達な時代には困難であった。その結果、サバンナ地帯においてはその価格は高いものになっていき、コーラナッツは富と権力の象徴としてあつかわれることになったのである [Trigart 1956: 211-214; Person 1968: 102]。

コーラナッツが西アフリカのサバンナ地帯で受け入れられたもう1つの理由としては、イスラム化の進展を考えるべきであろう。サバンナ地帯では、11世紀のアルプクリーの記録にマリの王のイスラムへの回帰の記事が見られるなど [Guoq 1975: 102-103]、かなり早い時代からイスラムが広まっており、コーランの教えによってアルコールの摂取は禁じられていた。そこでアルコールにかわる嗜好品が必要となり、コーラナッツが選ばれたのである。世界ではじめてコーヒーの飲用がイスラム世界で開始されたように、イスラム世界は非アルコール嗜好品にたいする根強い要求をもっている。コーラナッツにたいする好みも、おそらくおなじ理由によるのである。

2) コーラナッツの名称の分布

南の森林地帯と北のサバンナ地帯のあいだの顕著な相違は、コーラナッツの価値にかんするだけではない。それは名称の違いにもあらわれているのである。西アフリカ各地のコーラナッツの名称の分布をもとに、その交易の歴史を再構成したものにアメリカの歴史家ラブジョイの研究がある [Lovejoy 1980]。それにもとづきながら、少し詳をすすめることにしたい。

コーラナッツの自生ないし栽培のおこなわれている森林地帯の特徴は、その名称が社会ごとにいちじるしく異なる点にある。ラブジョイは西アフリカの森林地帯の32の社会の名称を比較しているが、そこでは4つ以上の社会に共通する名称は存在しないのである。これにたいし、交易によってそれを入手している北のサバンナ地帯では、その名称はおどろくほど類似している。多いのはguro, guru 系の名称であり、woro系の名称もかなり見られる [Lovejoy 1980: 104-105]。これにもとづいて地図を作ると図10ができあがる。
このような名称の分布は何を意味しているのであろうか。ラブジョイによれば、サバンナ地帯における名称の共通性は、交易品としてのコーラナッツにたいする嗜好がある特定の集団で開始され、そこから他の集団へと急速に伝えられたことを物語っている。というのは、コーラナッツが痛みやすい品物であること、そして遠く離れた土地でも名称にほとんど差のないことを考えすれば、コーラナッツにたいする嗜好は、すでに確立されていた交易ルートにのって各地に伝えられたに違いないというのである [Lovejoy 1980: 106]。

サバンナの集団のうち最初にコーラナッツの商品化をおこなったのはどの集団であろうか。サバンナにはもともとそれが存在しなかったことを考えれば、かれらが森の住人からその名称をうけとったであろうことは疑問の余地がない。このとき、西アフリカの熱帯雨林地帯の中でもアカンやヨルバ等の社会では、生産がきかんであるにもかかわらずその名称は北部に伝えられていない（図中の×印）。これにたいし、ギニア山地の西大西洋語族に属するキシやテムネ社会では kola と、そしてその東側のグロやコノ社会（南マンデ系）では guro, wuro と呼ばれおり、サバンナ地帯と共通している。こうした事実から、これらの社会で栽培化されていったコーラナッツが最初にサバンナのマンデ系交易者に与えられ、そこからさらに各地に伝えられていったとされるのである [Lovejoy 1980: 108-110]。

ラブジョイによれば、熱帯雨林地帯ではその自生ないし栽培は古くからおこなわれ
ていたが、今日にいたるまで評価が低いことに示されるように、かれらのもとではその商品化は進まなかった。これにたいし，11世紀頃からのマリ帝国の発展にともない，金を求めて南下し，イスラム・マンデ集団が，金の産地でもあったニジェール川上流地帯でこれを見つけ，高い商品価値を見いだすに至った。そしてそれはかれらの手で，西は大西洋沿岸のフォロフ社会から，東はハウサ－カヌリ社会にいたる広い地域に伝わられたのである [Lovejoy 1980: 108–117]。

一方，サバンナ地帯のうちでも guro と woro という名称の相関が見られるが，それはつぎのように解釈されている。最初にコーラ・ナッツの商品化をおこなったマンデ系集団においては，発音が g→w となる一般的傾向があり，かれらのもとでもともと guro と呼ばれていたコーラ・ナッツが wuro に変化したのちに伝えられた地域では，その名称が最初から固有名詞として受け入れられた。したがって，コーラナッツを wuro と呼ぶ社会は，guro の名称をもつ社会にすら比べると，マンデの交易ネットワークに組み込まれた時間が後の力に属すると推測されるのである [Lovejoy 1980: 107]。

3）歴史のなかのコーラナッツ


残念なことに，植民地化が進展した19世紀以前に，どれだけの量のコーラナッツが交易されていたかについての正確な資料は残っていない。1911年にシュヴァリエは，もっとも高い商品価値をもつ C. nigita の生産量が，西アフリカ全体で1万5,000トンにのぼると推定している。その内訳は，ガーナ（とくにアジャンティ地方）が5,000トン，シエラレオネとギニアがそれぞれ2,000トン，コート・ディボワール，リベリア，ボル
トガル領ギニアがそれぞれ1,000トンその他である（この時代にはナイジェリアではいまだC. nigitaの生産は始められなかったばかりであった）[LOVEJOY 1980: 124の引用による]。この数字は20世紀になってのものではないが、植民地化以前の実情とそれほどかけはなれてはいないであろう。ということは、この時代にはいまだ交通網が未発達であり、交易の内容に根本的な変化があったとは考えにくいこと、そしてもっとも高い生産量をもつアラビア地帯では17世紀くらい強大な王国が成立していたが、その経済的基盤は一貫してコーラナッツの取り引きにあったこと [GOODY 1967: 612]、などの理由からである。

コーラナッツはなぜそれはほど好んで取り引きされたのだろうか。経済学的な観点から見たとき、長距離交易に適した品物とはつぎの条件をみたしていることが必要である [HOPKINS 1973: 51sq]。ある地域において、なんらかの理由により（その品物の生産ができない等の理由）需要と供給のバランスがいちじるしく崩れていること、交通の未発達な時代には輸送コストが高くつくため、輸送コストを吸収できるほどに対価の価格が高価な品物であることを。これらの条件をみたしている金や胡椒等の商品が、古代・中世のヨーロッパにおいて長距離交易をうながす主要な要因となったように、西アフリカではコーラナッツがその役割を果たしていたのである15）。

コーラナッツの需要が西アフリカのサバンナ地帯のほぼ全土にあったことから、その交易は各地でしかかんとおこなわれていた。西アフリカの長距離交易の特徴は、1つの民族集団（そのなかでも特定の親族集団）が、買いつけから輸送、販売にいたる全行程を掌握する点にあった [COHEN 1966: 19; 1971: 266-267]。そうした方法は、交易がいくつもの民族集団をこえておこなわれるという事情によるものであったが、その結果、コーラナッツの交易に主に従事する交易者集団が、西アフリカの各地に形成されていったのである（図11）。

西の大西洋岸から見ていくと、ギニア山地のコーラナッツの生産地と消費地であるセネガルビア地方をむすぶ交易を掌握していたのは、マンリケ・モリやジャカンケと呼ばれるマンデ系の交易者集団であった [CURTIN 1975, I: 69, 228-229]。17世紀にガンビア川を船でさかのぼったイギリス商人が、マリバック（イスラム導師をさす

15）コーラナッツの交易は莫大な利益をもたらしていたようである。19世紀のフランスの植民地行政官であったバンジェールは、当時の西アフリカの風俗や慣習にかんじて貴重な記録を残しているが、かれによれば、Kongの町で20フレンチで仕入れたコーラナッツの包を、500クロメートルほど北のBobo-Dioulassoの町で塩の板に交換して戻ってくる、12倍の値段になったといいう [BINGER 1890(1892): 313]。また、19世紀末のイギリスの経済報告書によれば、コーラナッツの産地に近いGonjaで仕入れたコーラナッツを約2,000クロメートル離れたチャド湖周辺に運ぶと、その50〜60倍の値段で売れたという [HOPKINS 1973: 73の引用による]。
「マラブ」の意？）と呼ばれる黒人商人がコーラナッツの交易をおこなっていると言われており [Jobson 1904 (1623): 101], かれらの活動はかなり古くからつづけられていたようである。そこから東の、ニジェール川に沿った交易路を統括していたのはジュラと呼ばれるマンデ系商人であり、15世紀には worodugu というコーラナッツの名称をかぶせた小国家が建設されるほどに、その交易は重要になっていた [Person 1968: 101-117]。すでに見たようにかれらがはじめてサバンナ地域にコーラナッツをもたらしたと考えられる上、その活動はおそらく11-12世紀にさかのぼるものと思われる。また、のちの19世紀になると、フルベ社会がジハードをつうじてこの地方に政治的・経済的統権を確立するように、かれらのうちの領治域集団であったコーロコが交易にも従事するようになり、コーラナッツの交易者集団として形を作られたにいたった [Amselle 1977: 101sq.]。

コーラナッツの生産の一大センターであったアジャンティ地方と、西アフリカの商業とイスラムの中心であったニジェール川中流域とのあいだの交易を支配していたのは、ジュラないしワングラと呼ばれるマンデ系の交易者であり、1471年にポルトガル人がエルミナに交易拠点を開いたときには、かれらはすでに内陸三角洲のジェンネとのあいだに交易路をひらいていた [Wilks 1982: 333-344]。そのアンシャ
イスラムと西アフリカの物質文化


4) イスラムの影響

コーラナッツの栽培にたいしては、西アフリカの他の栽培作物がそうであったようにイスラムの影響は存在しない。その栽培はイスラムの影響が始まるまえにすでに開始されていたからである。しかしそれが西アフリカのサバンナ全土に通用する商品として、にあたっては、イスラムは決定的な役割をはたしたようである。コーラナッツにたいする嗜好そのものがイスラム化の進展にともなう現象であること、そして上にあげた西アフリカの主要な交易者集団がいずれもイスラム交易者であったことなどの理由からである。

南の森林地域から北のサバンナ地域へコーラナッツをはこぶかえらがなぜイスラムを必要としたのか、その理由についてはすでに別の箇所でよく解説されているので [竹沢 1988: 34–36]、ここではその要点だけを述べることにしたい。コーラナッツの交易が生態系の存するいくつもの民族にまたがっておこなわれた以上、その交易に従事したかれらは、民族の枠をこえたより大きな枠組みを必要としていた。というのも、西アフリカの諸社会のように伝統的な社会においては民族ごとに言語を宗教もこととなっており、それが民族の共通の枠を定めていたからである。かくして伝統的な宗教体系は、民族の枠をこえて活躍するかれらに必要な枠組みを提供することはできなかった。そこでかれらのはイスラムを受け入れることで、民族宗教の枠をこえた広い活動の場と移動の保障を獲得するに至ったのである。

このようにしてイスラムは、長距離交易者集団の形成というかたちで西アフリカの交易の進展に大きな役割をはたすことになった。そしてそのときコーラナッツは、交易に必要な商品を提供したのである。交易の進展が実現されるためには、世界の他の

地域でインド人やレバノン人、中国人等がその役割をはたしたように、交易に從事する業の集団の形成と、そしてこれが交易品の輸出が不可欠である。西アフリカにおいては、前者の役を果たすのが主としてマンデ系のイスラム交易者であったし、後者の交易品がコーラナッツであった。いえこれらは、コーラナッツは西アフリカの交易の発展に必要な材料を提供し、イスラムはその枠組みを与えた。その2つがあいまったことで、植民地以前の西アフリカに発達した交易のネットワークが形成されたことがある17)。

交易の進展によって言語も制度もことなる社会のあいだに文化の交流がもたらされ、それをつもうして社会の経済的および社会的成熟が実現されたことは、世界史上の常識である。そうした意味で、イスラムとコーラナッツは、西アフリカの交易の発展に寄与しただけでなく、経済的および社会的な成熟にも大きく貢献したといってもよいであろう。

3. 綿と毛の2種の布の生産

1) 織機の種類

アフリカ大陸ではさまざまな種類の織機が古くから用いられてきた。その構造や使用法については、すでにくわしい研究が数多くあるので、ここでは取りあげない。ここで問題にしたいのは、その起源と伝播、そしてそれがはたした歴史的役割である。アフリカ大陸に古くから存在した織機の分類については、ロートの古典的な研究がある。かれはそれを4種類に分類しているが、そのうち西アメリカでみられるのは、絹紡のない、縦糸を固定したタイプの垂直機と（図12）、足踏みペダルで縦糸を上下させるタイプの水平機である（図13）[Roth 1950 (1918): 26, 63]。このうち、前者の垂直機は世界中の伝統社会に広く見られる型式のものので、西アフリカではナイジェリア南部より東南のバノー系社会に広く存在する。それは固定した縦糸に横糸を通していく型式のもので、主としてラファヤン等の長織維を織るものにちかいられる。西アフリカでももっとも古いタイプのものと考えられている。

これにたいし、足踏みペダル式の水平式の織機は、紬糸や羊毛等の短織維を織るの

17) 15世紀以降、港の交易を独占しようとして海路西アフリカにいた了ボルトガル交易者は、各地でマンデ系の交易者と競合するにいたった。かれらの記録が残されて伝わっているように、1471年にかれらが現在のガーナのエルミナの地にいたった時には、地元と、当時の貿易地帯であったジール川中流域をむすぶ交易路がすでに完成していた。そのため、ルートはさらに西のセネガルビーチ地方までびた、そこをマンデ交易者は自由に往来していたのである。[Fernandes 1951 (1505–10): 47; Pacheco Pereira 1956 (1505–08): 123–125]。
にもちいられるものである。それは一般に2枚の縦糸をそなえ、これを両足
のペダルで操作して縦糸を上下させ、
そこに両方の手で交互に絹をとおして
横糸を繰りこんでいく。しかも西アフリ
カに見られるこのタイプの絹機は独
特の構造をもっており、縦糸の幅があ
たくて狭いこと（多くのはあい5
〜25センチメートル）、分解・組立ての
きわめて容易なること、縦糸のはじめ石
の重りをのせて縦糸に緊張をあたえて
いることなど、他に類を見ないユニー
クな特徴をもっている[LAMB 1975:
74]。

ロートの分布図が示すように、この
タイプの織機は世界中でサハラ以南の
西アフリカにのみ存在するものである
（図14）[ROTH 1950 (1918): 71]。しかもその中でも一部の社会だけがこれを活用
しており、その使用がきわめんな社会は、マンデ、ハウサ、フルベ、アジャンティ、ヨ
ルバなど、植民地化以前に交易の進展を見た社会にかぎられている。またこの2つの
タイプの織機がともに存在するナイジェリア南部などの社会では、垂直機をもちいて
布をおるのは女の仕事、水平機をもっているのは男の仕事というぐらいに、歴然とした
分化がみられる18）。こうした事実は、足踏みペダル式の水平機が、垂直機の浸透した
のちに発明ないし導入されたものであることを推測させている。

このタイプの織機の起源については、これまで多くの研究者がさまざまな見解を述べ
てきたが、まだまだ統一的な見解は成立していない。それゆえ、その問題にとりく
むためには迂回をし、このタイプの織機で織られる材料について検討しておくことが
必要であると思われる。縦糸と羊毛がどこからもたらされたかという問題である。

18）北アフリカにおいても、可動式の2枚縦糸の織機は男だけがもっているものであり、女は今も
固定式の織機をもっていて布を縫っている [Picron and MACK 1979: 102]。
2) 綿花と羊毛の起源

足踏みペダル式の縫機は主として綿糸であるが、この素材の起源についても諸説がある。ワタは繊維としてもちいられるだけでなく、油科植物としても活用されるため、その分布は世界中に広まっているとされる。アフリカにおいても、熱帯雨林地帯には野生種 Gossypium anomalum が存在し、そこでのワタの名称は多岐に多様である [Kawada 1988: 41]。熱帯アフリカの各地で、それがまず食用としてもちいられてきたことが推測されるのである。

問題は、繊維としてもちいられるワタの方である。アメリカ大陸から新しい種がもたらされる以前、旧世界で繊維として活用されてきたワタは2種類あった。アルボレウム種 (G. arboresum) とエルパケウム種 (G. herbaceum) である。旧世界でこれまでに発掘された織物のうち、最古のものはインドのモヘンジョダロの遺跡で見つかったものであり、エルパケウム種のワタをもちいて布にしたことが確かめられている。およそ BC 2000年頃のことである [Watson 1983: 35]。またそのほかにも、インドでは織物の記録はたいへん古くから存在し、BC 5世紀には国家の管轄下に置かれて輸出さ
れていたことが知られている。以上のことから、インドではじめてこの種のワタの栽培と織布の生産がおこなわれたことは確実と見られている[1983: 35]。

インドの初期の文献がすべて「紡の木」と書いているように、この種のワタは最初多年性植物であり、冬の寒さを越すことができないため、その栽培は熱帯地方にかぎられていた。ワタの栽培が熱帯から出たのは、記録では6-7世紀に中央アジアのトルファン地方が最初であり、そこから旧大陸の各地に伝えられていった。中国や日本に伝えられたのもこの種のワタ、ヘルパゲウム種のワタである[1983: 38-39]。

一方、アフリカ大陸では、布の生産は古エジプト王朝の時代から始められていたが、もちといわれる材料は主として麻であった[LOMBARD 1978: 45]。エジプトではじめて織布が出土するのは、ミイラをくるむ麻布にまぎれてっていたのが最初であり、紀元前後のことである[Cockburn 1975: 1158-1159]。しかしその後も、北アフリカやヨーロッパ世界での織物の主流は麻と羊毛でありつつ、ワタの栽培と織布の生
産が本格化したのはずっと後の時代でしかない [Lombard 1978: 70-71]。
サハラ以南の地域には、すでに見たようにワタの野生種が存在する。しかしそれは繊維の短いアノマレウム種であり、布を織るには不向きであった。またそれは、他の2種のワタとの混種ができないほど大きくすることの種である [Watson 1983: 31-32]。かくして、西アフリカで綿布の生産が開始されたのは、インド起源のワタがエジプトを経由して伝えられて以降と考えられているのである [ibid.: 41; Lombard 1978: 75-77] 19)。
これまでに西アフリカで発見された綿布のうち、もっとも古いものはドゴンの祖先民族とされるテレムの遺跡から出土したものである。その報告書によれば、11世紀以降大量の綿布と毛布が発掘されており、とくに綿布は、現存する幅の狭い繊維で織られたものと同一であるところから、現地で生産されていたと推測されている。また毛布の一部は幅 65 cm と広いものであり、北アフリカから運ばれてきたものであろう [Bedaux and Bolland 1980: 9-13]。おなじような綿布は、ドゴンの土地から真東に2000キロメートルほど離れたカネムの土地でも発見されており、正確な年代は測定されていないが10世紀以降と考えられている [UrvoY 1949: 20]。したがって、この時代までに、サハラの南縦帯で広く布の生産がはじまっていたことが十分推測されるのである。
もう一つの素材である羊の毛について、北アフリカでは古くから生産されていたことが知られている。ローマ帝国の時代からスペインやエジプトは良質の羊毛の産地として有名であり、麻とならんで織物の主要な素材であった [Lombard 1978: 23-35]。一方、西アフリカ地域でも、植民地化以前からマッシナ種と呼ばれる羊毛を産する羊が存在していたことが知られており、これはブルベ牧畜民の機織り集団であるマッポの手で布にされていた。それは主として遊牧ブルベがおる、カサ (kassa) と呼ばれる厚手のマントに仕立てられるほか、ニジェール川の中流域のゲンダム付近では、長さが8メートルにもおよぶ良質の壁掛けアルキレ (arkile) も作されている。これとはとくに新婚の夫婦の寝室を飾るのにもちいられ、そのようなものとして婚姻の給付に重要な役割をはたしてきた [Henry 1908: 191]。
このマッシナ種の羊の起源はどこであろうか。一時はこれが西アフリカ原産であり、良質の羊毛を産するメリノ種の先祖と考えられたこともあった [Pierre et Monteil 19]

19) 研究者の一部には、ワタの起源を西アフリカにもとめる見方もある [Purseglowe 1976: 299]。しかしのちに見るように、西アフリカのとくにサバンナ地方のワタの名称がアラブのそれと類似していることを考慮すると、少なくとも繊維用のワタについては北アフリカからの影響を考えるべきであろう。
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化


しかしながら、もしそれがヌプル牧畜民の移動にもなってもたらされたものであるとすれば、なぜその分布がジェール川内陸三角洲とその周辺に限られているのであろうか（図15）。ヌプル民族は西アフリカのサバンナ地帯のほぼ全域に広く分布しており、その材料となる羊毛にたいする需要はどの土地でも大きかったはずである。

したがって、かれらがそれをして小アジアから連れてきたとすれば、その分布は西アフリカ全土におよんでいたはずである。ところが現実には、それは西アフリカのごく一部の地域に限られている。そうであれば、この種の羊はかなりの時代になってはじめて導入されたものと考えるのが適切であろう。ジェール川中流域地帯は古くからサハラ交易の南の起点にあたり、また1591年からはモロッコ勢力の直接支配のおよんだ土地でもあり、北アフリカの資源や物資がもたらされたことは容易に想像できる。この種の羊もおそらくこうした交易ルートにのって導入されたのであり、その時期が比較的のもの時代であったために、他の地域に伝えることなく、今日にいたったのではないだろうか20）。

3）西アフリカの足踏みペダル式織機の起源

アラブの記録にじめて西アフリカの布の記述が登場するのは、10世紀末のことである。それまでの記録では、たとえばイブン・ファーキフ（Ibn al-Fakih）が903年にガーナ帝国の住人について、「かれらはこの地方に沢山いるひょの毛皮を着ている」 [Cuq 1975: 54]と書いているように、ほとんど裸か、せいぜい動物の皮を身にまとったものとして描かれている。これにおいし、10世紀のアル・ムッラビーは、イスラム化したガオの王が長上着を身につけ、ターパンを頭に巻いていることを記録しているし、11世紀のアル・バクリーは、イスラムの影響の強かったガーナ帝国におい

20）時の人間の生活が、フルべの創り出されたマッシナ種の羊の毛を利用しようとして、1906年から積極的にその買い付けをはじめ、1910年年辺にはその量は、年平均500トンにのぼっていた [Henry 1908: 324; Curasson 1932: 98–100]。500トンといえば現地で生産されるマント（カサ）が1枚約2キログラムであるので、25万枚に相当する。これに現地で自家消費されている分をくわえると、マッシナの羊毛の生産能力にはかなりものがあったことがわかる。この種の羊の導入が比較的近年のことであるとは、その分布がこの地方に限られていることによつて説明するのは困難である。
て、王とその後継者だけが縫った服を着用し、他は綿や稲の暖巻きを身につけていると書いている [1975: 77, 100]。こうしたことから、初期の研究書においては、西アフリカへの布の導入がイスラムとともにはじまったとされていたのである [Mauny 1961: 343-344]。

その後の研究の進展によって、上に述べたような西アフリカの織機の独自性が明らかにされることをともに、その起源についても単なるイスラム一辺倒ではない考え方があらわれてきた。起源については諸説があるが、最ももものは以下のところである。

1. 独立説。織機のタイプが異なる以上、西アフリカがそれを見たイスラム世界から受けたのではないかということは明らかだとする。しかしそれがだれの手で開始されたかについては、言及しない [Monteil 1927: 10, 72; Lamb 1975: 74]。

2. フルベ起源説。フルベが「中東からの移動」とともに、西アフリカにこの種の織機をもたらしたとする。その論拠とされるのは、フルベが中東から移動してきとしたとすれば、かれらは布を織る技術をすでにそこで手にいられていたはずであること、そしてかれらだけが有している羊毛が綿よりもはやくから布におられた素材であると考えられることである [Boser-Sarivaxevanis 1972: 141; 1977: 308-311]21]。

3. マンデ起源説。西アフリカの各地でもっとも織機に熱心なのはマンデ系諸民族であり、かれらがシェラレオネ等に現存する絹絨を固定したタイプの水平織機

21) ヴュレは、ワタについてもフルベがはじめてシリアからもたらし、これを織機とともに他に伝えたと考えている [Vuillet 1920: 52-55]。
から可動式の織機を開発して、他に伝えたとする [SCHAEDLER 1987 (川田の引用による, KAWADA 1988: 78)]。

これらの説は、残念なことにいずれも決定的な説得力を欠いている。もしフルベがあのタイプの織機をもたらしたのであらすとすれば、すでに検証したように、その材料である羊毛は西アフリカのもっとも広い地域に分布していたはずである。また、フルベあるいはマンデがこの織機の導入に決定的な役割をはたしたとすれば、その名称は他の社会にも伝えられ、かなりの共通性をもっていたであろう。しかし川田順造が明らかにしているように、このタイプの織機のもっとも重要な部分である縦縄の名称は、サハラ南縄のマンデ系、ソンライ、ハウサの社会を比較しただけでも、それぞれ niire, dange, alleeraa と大きくなっている [KAWADA 1988: 40]。したがって1つの共通の起源を考えることは困難なのである。

起源を考えるうえでのもう1つ重要の問題は、同じくこのタイプの織機の重要な部品である足踏みペダルである。このペダルは古代のヨーロッパや中東には存在しなかったため、そこでは長いあいだ織機にもペダルを使用しないタイプのもののがもちいられていた。古代中国で発明されたペダル式の織機が導入されたのは、中東ではヘルニズム期以降、ヨーロッパ世界では早くても11世紀以降でしかないのである [ENDREI 1968: 29; LOMBARD 1978: 230–231] (図16)。このようにペダルの導入が的の時代であるとすれば、フルベ起源説にせよマンデ起源説にせよ、いずれも根拠が薄弱であるといわなくてはならない。

それでも、西アフリカに特有のタイプの織機はどのようにして開発されし導入されたのであろうか。近年川田順造は、西アフリカのいくつかの社会の織機やワタの名称

![図16 足踏みペダルをもちいた織機のヨーロッパ最古の絵](image)

Job de Byzance の手稿 (1368) より [ENDREI 1968: 67]

569
を比較して、その起源に達する試みをおこなっている。それによれば、西アフリカの機織りの集団として名高いマンデ系、ソンライ、ハウサの3つの社会において、続続の名称はそれぞれniire^{22}, dange, alleeraaであり、大きな違いをみせている。この中では、マンデのniireがモロッコのniraときわめて近く、またアラビア語ではNWLの音が一般に水平機をあらわすことから、モロッコ方面からの伝播の可能性が高いとされる[KAWADA 1988:40]。

一方、ワタの名称についても、マンデ、ソンライ、ハウサのそれは、それぞれkorne^{22}, haabu, awudgaないし kudaであり、たがいに大きくこととなっている。

川田はこのうちのマンデの名称が、アラブのqtonからソニンケのkotoleをへてkooriに変化してきたと考えており、ここにも伝播の可能性はあるとする[1988:41]。しかし、川田自身が認めているように、ワタについても続続についても、他の2つの社会の名称の由来は不明なままである。

それでもどのように解釈すべきであろうか。ワタの名称についていえば、マンデのそれがアラブの影響を受けているように、ソンライのhaabuもまたアラブのuti, hatb[SERJEANT 1972:52,133]からきていることは明らかである。一方の続続については手元に資料がない。ただ、ワタや足踏みベダル式の織機がアラブ以降の地で作られたことが明らかであるとすれば、これがエジプトに伝えられたヘレンヌス以降に、北アフリカをへて西アフリカの諸社会にもたらされたものであることは疑いの余地がない。しかしながら、ワタについても続続についても、その名称が上の3つの社会でいちじるしくことになっていることは、重大な示唆をふくんでいる。少なくともその差異は、これまで見たしてきた階やコーラナッツの名称の類似性と比較したとき、きわめて顕著なものと映るのである。

もしワタや織機がある特定の社会集団から他に伝えられたのであれば、その名称はもっと類似していたであろう。ところがその名称がこれだけことなる以上、アラブ人による北アフリカの制圧が完了したのちにたとされたと考えることはできないであろう。アラブ人とイスラムは8世紀半ばには北アフリカを席巻したが、それ以前もそれ以降も、サハラの交易路はペルゼル諸王国の手にとげられていた。しかも北アフリカと西アフリカを結ぶ3本の交易ルートはそれぞれ別の勢力下にあり、その支配をめぐって争いは断絶なかった[LOMBARD 1971:71-77]。こうしたことを考えると、ワタとこのタイプの織機は、北アフリカにアラブの影響の強まった8世紀の前

---

22) むしろ続続についてはniri ワタについてはkoori，記すべきであろう[BAILLEUL 1981:151,246]。

570
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化

後に、いくつかのことがなるルートをつうして西アフリカに伝えられたものであろう23）。しかし北アフリカ伝来の織機は、ヨーロッパ最古の足踏みペダル式織機の核がなすように（14世紀、図16）、おそらく現在西アフリカでみられるような幅の狭い型の織機ではなかった。それを西アフリカの人がどうか以下に見えるような社会の実情によく合うように改良して、今の形に開発したものではないだろうか。

西アフリカにおける織物の古代性についてはいくつかの社会の神話が語っている。たとえばドゴン社会では、機織りの技術は、長纖維を編んでつくる腰巻のつぎにもたらされた2番目の「ことば」とされ、太鼓や火、農業といった他の文化的事象の出現より先に位置づけられている[グリオール 1981 (1948): 37 以下]。またその隣のバニパラ社会の神話でも、機織りの技術の出現は文化の出現と同一視され、しかも農業の開始以前に位置づけられている[DIETERLEN 1950: 102-104]。これらの社会は、必ずしも衣服と結びつかない非イスラム的伝統を長く保存してきた社会であり、西アフリカにおける機織りの技術の古代性を証明するものといえよう。

4）歴史のなかの布

先に見たように（図14）、幅の狭い足踏みペダル式の織機の分布は西アフリカだけであるが、その中でもそれを好んでもらっている社会は限られている。それは、マヌデ系、フルベ、ハウサ、アジャンティ、ヨルバといった、植民地化以前から商業の盛んであった社会である。

この中でももっとも大きな影響力をもたれたのはマヌデ系集団であった。かれらの活動の拠点となったニジュール川流域のうち、ジェンネやトンプトゥなどの都市は綿布の生産で名高く、16世紀のレオ・アフリカヌスによれば、ジェンネの商人はベルベル人とのあいだでおこなう綿布の取り引きで多大の利益を上げていた[LÉON L’AFRICAIN 1956 (1526): 465]。おなじ時期に、トンプトゥには26軒の綿織物屋が存在し、それぞれが50人から100人の従業をかかえて生産に努めており[TARIKH EL-FETTACH: 315]。それは西アフリカ全土のみならず、サハラをこえて北アフリカにまで輸出されていたのである[LÉON L’AFRICAIN 1956 (1526): 37, 465]24）。

しかし、かれらの活動はニジュール川流域に限られていたわけではなかった。わたしたちが前章で見たように、かれらはコーラナッツとともに、イスラムと織機をもっ

23）序のところで見たように、北アフリカと西アフリカのあいだでは何処かの交差ルートが走っており（図1）、イスラム以前からの長い歴史をもっていた。これらの交差ルートのうち主なもののが、西マグリブとマヌデ、東マグリブとガオ、エジプトとハウサを結ぶ3本のルートであったことは、きわめて示唆的であると思われる。

571
て西アフリカ各地に展開していたのであり、かれらの活動はほぼ西アフリカ全域におよんでいた。たとえば、かれらの本拠地のすぐ南に位置するセヌフ社会にこのタイプの織機を伝えた集団はジェラと呼ばれ、今日にいたるまでこの地方の機織りの仕事

**GRAPHIQUE 3.**

Evolution du rendement du tissage
(Exprimé en mètres de trame insérée par heure et par tête).

図17 ヨーロッパにおける織機の発表
足踏みペダル式の軽い紡績機は、13〜14世紀には完成を見、18世紀に産業革命がおこる以前にはもっとも効率のよいものの1つであった [ENDREI 1968: graphique 3]

竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化


かれらはなぜこのようにして織機をもって各地に移動したであろうか。かれらはなぜジェンネやトンブクトゥなどの都市で織った布を、他に輸出することで潤足しなかったのであろうか。おそらくそこにはかれらの戦略的な選択があったように思われる。1つのは理由は、すでに見たように前近代の社会では輸送コストが高くつくため、特定の地域で織った品物を他に運ぶより、織り手みずからが移動した方が安くつくということである。もう1つのは理由は、かれらの活動がいくつかの民族集団にまたがっておこなわれていたため、その交易ルートはつねに分断される危険性にさらされていったことである。かれらはおそらく金やコーラナッツを手にいれるための武器に布を活用したが、それを遠方から運んでいたのでは入手できなくなる可能性がかった。そこでかれらみずから交易ルートの最前線に住みこみ、そこで布を生産することで、商品とルートの確保を試みたのではないだろうか25)。

イスラムは衣類の着用を要求する文化であるところから、西アフリカにおけるイスラムと衣類の強き結びつきを説く研究者が多い[MONTEIL 1927:12; MAUNY 1961:245]。それはたしかに1つの事実であろう。しかし布と衣服にたいする嗜好がイスラムの範囲をこえて、広い地域で成立していたのもまた事実なのである。たとえばモシ社会は、今日にいたるまでイスラムの影響の少ない社会であり、王は非イスラム的な宗教体系の頂点に位置づけられてきた。しかしここでも王の即位にさいしては、この地方のイスラム集団であるヤルシが、白い綿の頭巾と衣服を王に着用させるのである[川田 1981:39]。同様の行為は、モシのさらに南部のマンプシ社会でも[LEVTZION 1968:133]、その西に位置するシエラレオネのいくつかの非イスラム

25) このことは逆に、輸送コストの低減と交易ルートの安全が確保された時には、都市における大規模な生産がおこなわれるということを意味している。すでに見つのように、マリやガの大帝国が成立して広域の支配がおこなわれた中世の一時期には、ジェンネやトンブクトゥなどの大都市での綿布の生産が飛躍的に発展していたし、西アフリカの諸社会が全体的な発展を迎え、いくつかの国家が成立と交易の進展が見られた19世紀には、ニジェール川流域やハウサ諸都市では奴隷をもって大きな規模な綿花栽培と綿工業がおこっていた[ROBERTS 1984:232-246; BARTH 1966 (1866), 1: 510 sp. ]。

573
社会でも [Skinner 1978: 61]，報告されている。その意味で，戦略的な商品としてこれを活用したマンデ集団の狙いは，見事に的中したわけである。

5) 布の生産とイスラムの影響

今まで見てきたところから，イスラムが西アフリカの諸社会で繊物の普及に大きな役割をはたしてきたことは間違いない。そしてそれは2種の意味においてであった。まず，イスラムは衣服の着用をその信徒にたいして求め，それをつうじてそれへの嗜好がイスラムの範囲をこえて広まったことである。さらにイスラムは，前章で見たようにそれにしたがう交易者集団を育成し，伝統的な民族宗教では与えることができない広い枠組みを用意することで，かれらの活動を容易にしたことである。機織りの技術を手にしたかれらは，言語も慣習も異なる人びとのあいだに容易にはいっていくことができたのであり，それをつけうじて西アフリカの多くの社会にさまざまな影響をもたらしたのであった26)。

一方，外部の勢力としてのイスラムの影響はどうであったか。衣服にたいする嗜好がまずイスラムに結びついていた以上，それをおたれた北アフリカのイスラム勢力の影響は大きかったというべきであろう。また，イスラム以前か以後かを決定することが今の段階では不可能であるとしても，西アフリカの綿花と足踏みペダル式織機の導入が北アフリカを経由していたこととはほぼ確実であり，この点においても北アフリカの影響は決定的であったと思われる。おそらく西アフリカは北アフリカーイスラム文化を経由して衣服の嗜好とその製作の技術を受けとったのであり，それをつうじて精神文化と物質文化の2つの形式の大きな変革を実現したのである。

4. しばり舟とくりぬき舟

1）西アフリカの舟の種類

西アフリカにはさまざまなタイプの舟が存在していた。中世から近世にかけてこの地をおどろかたアラブやポルトガルの旅行家・交易者の記録や，近世になってからのヨーロッパの探検家や植民地の記録は，そのくわしい記述を今に伝えている。

西アフリカの舟についての最初の記述は，12世紀のものである。ガーナ帝国につい

26) イスラム交易者たちは，布を織る技術をもたらしただけでなく，他の手工業の発展にも大き
く貢献した。とくにかれらは西アフリカの広い範囲に，銀治や土器作り，金属加工，鮎の開発
等の手工業をもたらしたともに，その育成をおこなった。この点については，[竹沢 1980:
25] を見よ。
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化

ての記述のなかでアル・イドリシー（al-Idrisi）は、ナイル川（ニジェール川のこと）の流域では漁や移動のために「堅固に作った舟」を用いていると考えているが [Cuq 1975: 134]、これはしばしば舟のことを指しているように思われる27）。ついで14世紀になると、イブン・バツータの記録があらわれる。かれはマリ帝国の首都を訪れたちに、北アフリカに戻る途中でトンブクツーからガオまで舟にのっているが、それは「一片の木をくりぬいた小さな舟」であった [1975: 315]。

ヨーロッパ人のアフリカ経営の本格化する19世紀になると、さまざまな舟についてのよりくわしい記録があらわれてくる。18世紀末にセグー王国の首都をおとずれたマンゴ・パークは、ニジェール川を往来する大量のくりぬき船を見ているが、そのなかのあるものは「くりぬいた2木の大木を縦に長く結びあわせたもの」であった [パーク 1978 (1907): 191]。また、ヨーロッパ人としてはじめてトンブクトゥをおとずれて生還したルネ・カイエは、ジェンヌからトンブクトゥまで舟にゆられているが、それには「現地の柳で板を結びあわせてつくったしばり舟」であり、そのうちの1つは長さ30メートル、幅4メートル、高さ2メートルという大きなもので、米や布、コラナッツなどの積荷のほかに、4,50人の奴隷をはこんでいた [CAILLIE 1979 (1828), II: 171]。一方、フランスの軍人であったバンジェールがコート・ディボワールで見たのは、細枝で作った枠の上に皮を張った小さな舟であった [Binger 1980 (1892) II: 81]、舟を作るための木のほとんどないチャド湖では、今日にいたるまでパ

図18 チャド湖のバビリス舟 [BLACHE et MITON 1963: 115]

27）この記述がしばり舟を指しているのは、本当らしく思われる。というのは、16世紀のポルトガル人交易者フェルナンデスは、サハラ砂漠のモール人のもとでしばり舟を見ているからである。それは1枚の底板の上に2枚の側板を締で結びつけ、さらに前後ろに2枚の板をゆきえて作ったものであった [Fernandes 1938 (1506-07): 117]。このタイプのしばり舟は18世紀になってもセネガル川流域でもちいられていたことが、当時のフランス人植民者によって報告されている [Labat 1728, II: 84 (Fernandes 1938 の訳者の引用による 1938: 170)]。
ビルスでつくった舟が見られるのである [Blache et Miton 1963: 120]（図18）。
これらの舟のうち、植民地以前の西アフリカでもっともよく用いられていたのは、
他の前近代社会どうようくりぬき舟であった。15世紀以降、西アフリカ沿岸地帯に
やってきたポルトガル交易者が各地で見たのはこれであり、そのなかには120人もの
人間を同時に運ぶことができると小型のものもあった [Fernandes 1951: 29,
95]28）。しかしこくりぬき舟は、もともと1本の木をくりぬいて作る以上、その大きさ
には制約がある。大量の物資の輸送を必要としていたニジェール川中流域で好んで
もいちまったのは、板を紐でしばって作ったしばり舟であった。

2）しばり舟の製法

ニジェール川の中流域でもいちまれていたしばり舟には、2つの種類がある。鉄を
まったくもちわず、全ての板を紐で縛いあわせたタイプのしばり舟と（図19）、板を鉄
のかすがいでといて作った前後2つの部分を、紐でしばって作るタイプのものである

![画像](#)

図19 ガオ型のしばり舟 [Pitot et Daget 1948: pl. II]

28) Fernandes のほかにも、16、17世紀の多くのヨーロッパ人交易者が大型のくりぬき舟につ
いて書いている。Pacheco Pereira がナイジェリア東南部で見たのは一度に80人を運べるく
りぬき舟であったし [Pacheco Pereira 1556 (1505-08): 147]、ガングア川で Gomes が見た
のものは38人ずつの戦士ののった2隻の戦闘用のくりぬき舟であった [Gomes 1559 (1580): 46]。
さらに現在のガーナの地でオランダ人 de Mares の見た舟は、帆をかかけて外洋を自由に航
行することのできる10メートル以上の長さの大型のくりぬき舟であった [de Mares 1867
(1602): 118]。ヨーロッパ人の手でこれまでに報告されたくりぬき舟のうちもっとも大きなも
のは、ニジェール川河口で観察された長さ24メートルのもので、100人以上の人数を運ぶこと
ができたとされている [Smith 1970: 518]。一方ニジェール川中流域では、大木が少ないとこ
ろから、くりぬき舟を2つつなげたものやしばり舟が好んで用いられていた。19世紀にセーラー
の地を支配したフランスの Mage は、長さ10メートルのくりぬき舟を仮に2つ結んだ大きな
舟をいるている [Mage 1890 (1868): 80]。おおよそ19世紀のルネ・カイエののったしばり舟
は長さが30メートルもある巨大なものであった [Caillie 1828: 171]。また20世紀の
初めにシェンの植民地政府官であったモンテイユは、ガオ帝国の時代にもちられていたと
される伝説的なしばり舟について書いているが、それは1度に6000本の板（約180トン
を運ぶことができる巨大な舟であった [Month 1971 (1932): 247]。
図20 ジェンネ型の舟
かすがいで止めて作った前後2つの部分を紐でしばりあげたもの
[Pitot et Daget 1948: pl. II]

（図20）。この地方の舟についてほとんど唯一の研究をあらわしたピトとダジェは、前者をガオ型、後者をジェンネ型と呼んで区別している [Pitot et Daget 1948: 19-23]。後者のタイプの舟は、ジェンネ付近のボソが発明したものといわれ [Monteil 1971 (1932): 246]、内陸三角洲で見られる舟は今ではすべてがこのタイプになっている。もう1つのガオ型のしばり舟は、デボ湖より下流では今でも存在することはするが、その数はわずかでしかない。それゆえ以下にジェンネ型のしばり舟の製法について見ていくことにしたい。
表3 しばり舟の幅と長さ、積載量

<table>
<thead>
<tr>
<th>幅</th>
<th>長さ</th>
<th>積載量</th>
<th>費用</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>2</td>
<td>23×2</td>
<td>0.8</td>
<td>125</td>
</tr>
<tr>
<td>2.5</td>
<td>30×2</td>
<td>2</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>35×2</td>
<td>3</td>
<td>175</td>
</tr>
<tr>
<td>3.5</td>
<td>40×2</td>
<td>4.8</td>
<td>250</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>50×2</td>
<td>10</td>
<td>350</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>60×2</td>
<td>20</td>
<td>550</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>68×2</td>
<td>34</td>
<td>1,000</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>80×2</td>
<td>45</td>
<td>1,250</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>87×2</td>
<td>80</td>
<td>2,000</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>92×2</td>
<td>80</td>
<td>3,500</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>100×2</td>
<td>120</td>
<td>5,000</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>105×2</td>
<td></td>
<td>8,000</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>110×2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（1985年Nouh村での調査）

ニジェール川沿いの漁民の村を訪れると、たいてい川辺りによしす掛けの小屋が立てられており、中で舟を作っているのを見ることができる。かれらの中には舟大工と称することのできる専門的な技術者もいれば、ふだんは漁をして、漁のないときだけ舟を作る者もいる。舟の材料となるような大きな板はこの地方にはあまり存在しないので、南のコード・ディボワールから運ばれてくるものが用いられている。板の手配は一般に舟大工の仕事であるが、なかには依頼者自身が板をもっこんで、請負で舟が作られることもある。

注文が入ると、地面の上に直接設計図が描かれ、その上に板が並べられていく。舟の形や大きさには村ごとの傾向があり、長さと幅の割合は村ごとに定められている。この地方には長さをはかる計測器が存在しないので、英語のフィートと同じように長さはすべて足の裏で計られ、1足分を基礎として、2足分、3足分と数えていく。内陸三角洲の造船の中心地の1つであるヌー村の場合、最小の舟は幅2足分、長さ22-23足分と定められており、これを前後に2つつなげたものが全体の大きさである。舟は幅で2足半、3足と大きくなっていき、最大で幅12足、長さ80足、高さ8足の舟になる。この大きさは船底のそれであるため、舟の甲板の部分の大きさはこれより2割程度大きくなる。1足を30センチメートルとして計算した場合、この地方最大の舟で、甲板の部分の長さ60メートル、幅4.5メートル、高さ2.5メートルという大きなものになるわけである（表3）。

板が十分集まったことが確認されれば、よいよ製作が開始される。2つの部分の
うちはまず最初に前半分が作られるが、それは舟のうち前の部分がもっとも重要であり、またそれを作るのが難しいので、それから作られるのである。触先用に木をくり抜いたものに底板をはりあわせ、ついで側板がはられていく。これにもちいられる道具は手斧ときりだけである。モブチやヌーといった造船の中心地では、近年になって錬ももちいられるようになってきたが、それ以外の村ではむしろ例外的である。2枚の板はできるだけ接合面が大きくなるように斜めに削られ、物差しも錬ももちいずに真っ直ぐに削っていく技術はまったく見事である。

2枚の板がしっかり噛み合っていることが確かめられれば、つきはかすがいでとめ合わされる。作業所の近くに火をおおしてきりを真っ赤に熱し、噛み合わせた2枚の板にこれを押しあてて穴をあける。ついて板と板のあいだに、水が入らないようにカリテの油にバオバブの粉末をまぜた詰め物を厚くぬって、内側からかすがいを通してこれをしっかり固定するのである。

こうした作業をくりかえて前後同型のものが2つできあがると、いよいよ両者が結びあわされる。このためにもちいられる繊は、現地で栽培されるダー（Hibiscus cannabinus）の纖維から作ったものである。2つの部分の接合面から10 cm ほどの所にきりをもちいて一列に穴があけられると、両者が擦れあわないように間に詰め物をして繊で結びあわされる。それがわると、舟の全面にカリテの油に炭の粉を溶いたものを塗って板の腐敗を防止する。そして最後に、舟の触先の部分にさまざまな模様
が描かれて完成となるのである。

舟を作るのはこの地方の先住民族であるポゾの仕事である。この地方には、専業的な漁民としてかくれのほかに、かつてのパンパラ王国の漁業と水上運搬の「カースト民」であったツノノが存在するが、舟を作ることができるるのはポゾだけである [Paques 1954: 96; Jeay 1980: 18]。そうした規定に、この地方の地域の真の所有者とみなされている「水の精霊」にたいする信仰が作用していることは間違いがない 29)。また舟の舳先に模様を描くのも舟大工の仕事であるが、その意味は今日に伝えられていない。しかし植民地時代の研究を見ると、その意味内容について世界の創造や「水の精霊」との結びつきが指摘されており [Griaule et Dieterlen 1949: 211-212]。日本における「舟魂さま」の信仰のようなものがかつては存在していたのかもしれない。

3）しばり舟の起源

こうした種類の舟はいつ頃、どのようにして作りはじめられたのであろうか。鉄のかすがいをもちいた舟についていえば、19世紀前半以前にさかのぼらないことは確実である。というのも、1833年にジェンネからトンブクツーまで舟旅をしたカイエは、ニニュール川に浮かぶいくそうものしばり舟を見ており、そのなかのものは長さ30メ

29）ポゾの「水の精霊」については [竹沢 1988: 874 sq] を見よ。
トルンにおよぶ大きなものであったが、「(この地方の)人びとは、舟を作るのに鉄をも
ちいる習慣がない」とはっきり書いているからである [CAILLIÉ 1979 (1828): 171]。
一方、鉄をまったくもちいない、すべてを織でしばったいわゆるガォ型の舟の方はど
うであろうか。このタイプの舟は報告されているのは、西アフリカではこのニジェー
ル川中流域のほかに、先に見たセネガル川流域、そしてチャド湖南部の、かつてコト
コ王国の栄えたチャリ川流域である [BLACHE et MITON 1962: 59, 78]（図21）。こ
れらの土地はいずれもサハラ砂漠に接する箇所であり、西アフリカのうちでももっと
も強く北アフリカ文化の影響を受けた土地である。そうであれば、鉄をもちいないで
板を綿でしばって舟を作るという技術は、北アフリカからイスラム勢力の手をへて西
アフリカに導入されたであろうか。

性急な結論をくだす前に、立ち止まって考えることが必要である。このタイプの舟
を必要とする条件は何であろうか。そこには2つの条件があると思われる。1つは、
大型のくりぬき舟を作るのに必要な大木が存在しないことであり、もう1つは、にも
かかわらず政治・経済的な理由により大型の舟にたいする需要があることである。

西アフリカのうちでも巨木の茂る森林地帯にはこのタイプの舟は存在せず、くりぬ
き舟が主流を占めていた。そのなかには、すでに見たように100人あまりの人間を一
度に運べるものもあったし、それでもなお小さく感じられたときには、セグーの舟の
ように2つのくりぬき舟を絹に長くつなげて使うこともできた。これにたいし、サハ
ラ砂漠に接するニジェール川中流域やチャド湖付近では木が不足しており、大型の舟
を作ることはきわめて困難だったのである。

しかしこの一方で、これらの地域は北の砂漠と南のサバンナの接する地点にあたり,
両者のあいだの交易を軸として、古くから強大な国家や、トンブクトゥに代表される大都市が成立していた。なかでもこれらの都市は砂漠かそれに近い土地に成立していたため、穀物をはじめとする大量の生活物質を他の土地から運んでくる必要があった。砂漠の中にあるトンブクトゥの繁栄が、南のジャンネを中心にした内陸三角洲という穀倉地帯に支えられていたように [Tarikh el-Fettah 22–25]、セネガル川流域にきずかれた16世紀以降のワアロ王国も舟で大規模に塩や穀物の取り扱いをおこなっており [Barry 1985 (1972): 60, 103]、「農業の困難であった」チャド湖畔に栄えたボルノ王国もそうだったのである [UrvoY 1949: 45]。

ここで興味深い事実は、チャド湖およびその南部の地域で、パピルス舟からくりぬき舟、くりぬき舟の両側に側板をはった準構造舟（図22）、そして全体を縛でしばったしばり舟（図21）までがそろって見られることである [Blache et Miton 1963: 59, 115, 120]。一方ニジェール川流域では、これほど徹底した発展のあとはを見ることはできないが、くりぬき舟、くりぬき舟を2つつなげたもの、そしてしばり舟という発展を推測することは可能である。これらの事実は、北アフリカの影響などで、西アフリカで独自にしばり舟が開発されたことの可能性を十分に示しているといえよう。

4) 歴史のなかのしばり舟

西アフリカの歴史のなかでしばり舟がもっとも重要な役割をなったのは、ニジェール川中流域において。その舟は、ジェンネという後背地にささげられた砂漠の交易都市トンブクトゥの繁栄を保障していたし、また軍隊の移動や通信の迅速を可能にすることで、マリやガオ等の大帝国の政治支配を容易にしたのであった。

大帝国の時代のトンブクトゥの繁栄については、さまざまな記録が証言している。

30) イラク湖付近の交易にしばり舟が用いられていたかどうかについては、記録を入手していない。ただ、チャド湖付近は10世紀から朝詔をひろげたポルノ・カナム帝国において、塩とチャド湖でとれる干し魚の交易はたいそう盛んであったこと、そしてチャド湖付近では耕作がほとんど不可能であったため、食品はより南部の地からはこぼされていたと明記されている [UrvoY 1949: 34]。しばり舟がこれらの物資の輸送にもちいられていた可能性は、十分にあったのである。
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化

「（1591年の）モロッコ軍の遠征の前夜、トンプルトゥはその美と栄光の頂点にたっしっていた。宗教はこの地に花開き、預言者の伝統は、宗教的な領域であれ世俗的な領域であれ、あらゆるものに生命を与えている。それらは驚くべきことである。なぜならこの2つの領域は、定義からいっても重なることはないからである」[Tarikh el-Fettach: 312]。

この表現は誇張ではなかった。トンプルトゥの町には、それぞれ50から100人の徒弟をかかえた機織り師の作業場が26あった [ibid.: 315]。コーランの読み書きを数える学校も150を数えていた [ibid.: 315]。この町を訪れる外国人交易者は、「フェスやモロッコからだけでなく、カイロからもたくさん来て」し [Lange et Berthoud 1972: 327-329]、かれらの運んでくる商品、とくに布や紬、貝、銀にたいする需要は多くあり [ibid.: 329]、「ヨーロッパの布も多数売られ」ていた [Léon L'Africain 1956: 467]。そのおかげで、「この町の外国人商人はとても豊かだった」のである [ibid.: 467]。

こうしたトンプルトゥの繁栄を支えていたのは、後背地としてのジェンネおよびニジェール川内陸三角洲の存在であった。というのも、16世紀にトンプルトゥを訪れたレオ・アフリカヌスが言明しているように、「トンプルトゥには穀物や家畜はひとつないか……その周りには1つの畑も果樹園も見あたらない」[Léon L'Africain 1956: 468-469] からである。そこでこの町を維持するためには、その住人の生活に必要な生活物資を他からはこんでくる必要があった。それに用いられたのが、レオ・アフリカヌスはじめ多くの外国人旅行者も書いているように、ニジェール川の多くの舟だったのである31) [Léon L'Africain 1956: 465; De la Roncière 1925: 155; Fernandes 1938: 85]。

ジェンネとトンプルトゥの関係について、トンプルトゥで書かれた歴史書のつぎの一節ほど適確に表現したものはないであろう。

「ジェンネはイスラム世界のなかでもっとも大きな市場の1つである。そこでは、テガザの塩山からきた商人と、ビドゥの鉱山から金を運んできた商人とが顔を合わせる。この2つの素晴らしい市場は世界に類を見ないものである。そこで商売をする人間は大きな利益を得ることができるが、その儲けの大きさといったら神様だけが御存じだろう。トンプルトゥの町

31) これらの記録は曖昧さをふくんでおり、当時もいられていたのがくりぬき舟であったのか、それともしばしば舟であったのか、明確にすることは困難である。ただ、ジェノヴァの商人Malfanteは船（barchas）と書いており [De la Roncière 1925: 153]、トンプルトゥで作られた歴史書も、くりぬき舟と運搬用の大型船を区別して書いている [Tarikh el-Fettach: 270]。ところから、この時代にすでにしばしば舟が存在していたと考えることは十分可能であると思われる。
に、東からも西からも、北からも南からも、あらゆる方向からキャラバンがやってくるのは、
霊に祝詔されたこのジェンネの町のおかげなのである」【TARIKH ES-Soudan: 22-23】。

このようにニジェール川の舟は生活物資の輸送に大きな役割をはたしていたが、そ
れだけではなく、政治的および軍事的な支配の確立のためにも大きく貢献していた。と
くにガオ帝国の時代に、各地にあった王の領地から税をはこぶのはこの舟であり、ガ
オの港には常時運用用の大型舟400隻と王直属の舟1000隻、そのほかに漁や交易用の
舟が700隻あったといわれている【TARIKH EL-FETTACH: 270】。しかもそのうちのあ
るものは、500キロメートル離れたジェンネとトンブクツーのあいだを4日で結ぶな
ど、緊急の連絡用にも用いられていたのである【TARIKH ES-Soudan: 392-393】。

これらの舟は、どじに軍事的目標にももちいられていた。ガオ帝国の「奴隷部
族」の1つであったゼンジは、戦時には王の軍隊と兵糧をはこぶ義務を置いていたし
【TARIKH EL-FETTACH: 110】、かれらをひきいる船隊の長は、王直属の将軍の1人に
数えられていた【ibid.: 89, 209】。また、ガオの王が砂漠の中にあるワラクの町を攻撃
するのに、400キロメートル離れたニジェール川から運河をひこしたというエピ
ソードが示すように【ibid.: 114-115】、ガオ帝国の重要な戦争はすべてニジェール川
沿いでおこなわれており、その領地もニジェール川にそって広がっていた【Tymowski
1967: 85】。

このようにしてニジェール川の舟（おそらくしばり舟）は、中世の西アフリカにお
いてもっとも繁栄と集権化を実現したガオ帝国の、政治と経済を支える重要な柱の1
つになっていたのである。

5) イスラムの影響

わたしたちが見てきたように、西アフリカのしばり舟が、古くから存在していなく
りぬき舟から準建造船へと発達してきたものであるとすれば、イスラムの直接的影
響を考える必要はない。しっかりとしばり舟を必要とした論理の成立——大木の少ない地
方に、大量の物資の輸送を必要とする政治・経済的体制が確立したこと——において
は、イスラムの影響は決定的であった。というのも、これまでに報告されたしばり舟
の存在は、ニジェール川中流域やセネガル川流域、チャド湖湖畔にかぎられているが、
それらはいずれも北アフリカとの交易で栄えた土地であり、それを基礎に都市や大帝
国の成立を見たのであった。そしてイスラムは、これらの都市や大帝国の建設に決定
的な役割をはたしていたからである。

584
結　論

わたしたちはこの研究を2つの視点からおこなってきた。西アフリカの物質文化にたいするイスラムの影響と、歴史資料としての物質文化的可能性である。したがって結論も、この2つの視点から議論していくことにしたい。

まずイスラムの影響について。わたした者がここで取りあげた4つの項目——穀物の栽培作物、コーラナッツ、綿と毛の布、しばり舟——のうち、布を織る技術をのぞいては、イスラムのいたした役割はむしろ二次的なものにすぎなかった。イスラムは直接それらの技術をもたらしたわけではない、すでに西アフリカに存在していたそれらの技術や事情の、伝達と拡散の役割に終始したように思わわれるのである。

そうしたことは、おそらく西アフリカの物質文化が、栽培作物についてもその他の技術についても、イスラムの浸透以前にすでにかなりの成熟をもって成立していたためである。その結果、イスラムが10世紀以降にこの地に伝えられたとき、それは技術革新の大きな要素となることはできず、むしろすでにあった技術の発展と拡散のための一層の触媒として作用するにとどまったのである。（ただ足踏み式織機とその素材としての綿花や羊毛については、その導入がイスラムの影響の開始と前後しているのは事実である。現時点ではイスラム以前であるとも、以後であるとも確証することはできないのである）。

しかし他方で、西アフリカの文化受容の否定的側面もまた認識すべきであろう。つまり、当時もっとも先進的であったイスラムの物質文化を部分的にしか受容しなかったということであり、そして16世紀のトンブクトゥやガオ帝国に花開いた西アフリカ文化的精髄が、その後ほとんど発展らしい発展を見なかったということである。そこでわたしたちが取りあげたいくつかの物質文化と、それをふくめた社会的・経済的な諸制度は、15-16世紀のニジェール川中流域にすべて出そろったのち、19世紀の一連のハーフド国家の成立まで長い停滞の時期を経験したようである。もちろんそこには、サンバナから森林地帯に向かう拡大の流れは存在していた。しかしそれは量的な拡大であって、質的な発展であったとは思われないのである。

そうしたことは、モロッコ軍によるガオ帝国の壊滅と、サハラの乾燥化にともなうサハラ遊牧民の南下、そしてヨーロッパ勢力の奴隷貿易がもたらした人口停滞等の外的要因が作用していたことは疑いない。しかしそれだけでなく、西アフリカの諸社会の側にも順調な発展を阻害した（あるいは発展を必要としなかった）諸要因はおそらく存在していたのである。わたしたちはそれを見きわめることによって、社会的お
表4 西アフリカの諸社会の，穀，ワタ，コーラナッツの名称の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Wolof</th>
<th>Jola</th>
<th>Furbe</th>
<th>Bambara</th>
<th>Sonrai</th>
<th>Mossi</th>
<th>Ashanti</th>
<th>Hausa</th>
<th>Yoruba</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>rice (0 c?)</td>
<td>malo</td>
<td>emano</td>
<td>malo</td>
<td>moo</td>
<td>malo</td>
<td>moo</td>
<td>moo</td>
<td>siinaka moo</td>
<td>siinaka</td>
</tr>
<tr>
<td>coton (8 c?)</td>
<td>wuten</td>
<td>buhul</td>
<td>hotello</td>
<td>koori</td>
<td>laamu</td>
<td>lamdo</td>
<td>asawaa</td>
<td>avudiga kuda</td>
<td>efeowu</td>
</tr>
<tr>
<td>kola (11 c?)</td>
<td>guro</td>
<td>guru</td>
<td>goro</td>
<td>goro</td>
<td>goro</td>
<td>goro</td>
<td>bese</td>
<td>goro</td>
<td>o-bi</td>
</tr>
</tbody>
</table>

と、経済的な発展と「停滞」の諸条件についてより深い理解を得ることができるようになるであろう。

もう一つ、歴史資料としての物質文化の可能性について、わたしたちがここで取りあげた4つの項目のうち、しばしばをのぞく3つについては、その名称の分布をある程度明確にたどることができる（表4）。この表と図5、図10にもとづいて、それぞれの社会における名称を比較してみると、これらの項目が拡散していた時代と状況についての概観を得ることができると思われる。

わたしたちは先に、グラベルマ穀の栽培化の時期を紀元前後、繊維をとめるためのワタと足踏み式織機の導入を8世紀前後、そしてサバンナ地域におけるコーラナッツの商品化の時期を11世紀から14世紀のあいだにおいた。この推定年代をこれらの項目の名称の分布を比較してみると、興味深いのは、たとえば歴史的に稲作が大きなウェイトを占めたことが明らかであるソニライ社会へのその導入が、比較的のちの時代に属すると思われることがある。ソニライの伝承によれば、その先祖は東の土地からきたとされており、そのことはナイロート系に属するかたちの言語の証明で示されている。おそらく彼らはそれまで稲作を知っていなかったが、ニジェール川流域にたつとどうに先進のマンデからこれを授けとって、その栽培に熱心になるともに民族的な結集の契機となったのである。そしてそれが、のちに西アフリカの歴史上もっとも広大な地域を支配し、もっとも集権的な政治制度を実現したガオ帝国の成立のための布石となったのである。

またこの表からうかがえるのは、西アフリカの歴史においてマンデ系社会のはたした役割の大きさである。それは、それまでのアフリカの農業水準をおそらくこえていた稲作の技術を他に伝えただけでなく、すぐれた交易品としてのコーラナッツの商品化をはたし、そしてイスラムの要請をみたす機織り技術の拡散など、さまざまな点に
竹沢 イスラムと西アフリカの物質文化

おいて西アフリカの諸社会の歴史的成熟のための重大な要因となった。その意味で、マンデ系社会を看過しては西アフリカの歴史を考えることはできないといっても過言ではないだろう。

ただここでは深く考察することができなかったが、稲とコーラナッツの名称がくも広範囲に共通しているのにきらべると、ワタの名称に際だった差異が存在することを1つの課として残る。しかもその名称は、古くから食用に用いられていたと思われる熱帯雨林地帯だけでなく、イスラム世界の強い影響があったであろうサバンナ地帯でも大きく存在している。あるいはこのことは、繊維に用いられるワタがイスラム世界を経由してはじめて伝えられたというより、むしろ西アフリカでかなり古い時期から、食用および布以外の繊維として活用されていたことを示す資料であるのかもしれない。この点については今後さらに広範囲な研究をおこなうことにしたい。

わたしたちがここで取りあげた物質文化の項目は4つだけであり、そこからこれ以上まとまった結論を引き出すことは困難である。ただ、今後取りあげる項目の数をふやしていくことによって、西アフリカの歴史についてのより深い理解を得ることは可能になるであろう。そしてそれをおこなうことによって、はじめて歴史資料としての物質文化の有効性についても正確な判断が下せるようになるであろう。今後の課題とした。

またここではとりあげなかったが、西アフリカの歴史を考えるうえで不可欠の物質文化がいくつかある。たとえば、農業技術や武器として決定的な役割をはたした鉄その他の金属加工の問題、西アフリカの広い地域で古くから貨幣としても使われていたタカラガイ、そして西アフリカの経済をもたらした金の問題等である。とくにこの最後の点は、たんに西アフリカの経済的発展だけでなく、ヨーロッパ世界が中世から近世に移行するうえで決定的な役割を果たしたことがマルク・ブロッケやブローデルらの古典的研究にいちいち明かにされており、世界史の再考につながる重要な問題を提起するものである。稿をあらためて論じることにしたい。

さらにここでとりあげた物質文化に密接に結びつく事項として、これらの技術を担った（担われた）社会集団としてのいわゆるカースト制や奴隷制の問題がある。これらの問題についても、機会をあらためて考える予定である。
文献

ALEXANDRE, R. P.
1953 La Langue mòrt. Mémoires d' I.F.A.N., no. 34.

AMELLE, Jean-Loup

BAILLEUL, Charles

BARRY, Boubacar

BARTH, Heinrich

BASIL MISSIONARY SOCIETY

BEDAUX, R. M. A. & Rita BOLLAND

BINGER, Le Capitaine

BLACHE, J. et F. MITON
1963 Premiere contribution à la connaissance de la pêche dans le bassin hydrographique Logone-Chari-Tchad. O.R.S.T.O.M.

BOSER-SARIVÁEZANIS, Renée
1972 Les Tissus de l'Afrique occidentale. Pharos-Verlag Hansrudolf Schwabe AG.

BOVILL, E. W.

CAILLÉ, René
1979 (1828) Voyage à Tombouctou. Maspero.

CALVOCORESSI, D. & Nicholas DAVID

CHANG, T. T.

CHEVALIER, A.

CHURCH MISSIONARY SOCIETY

Cissoko, S. M.

CLARK, J. D.
1970 The Prehistory of Africa. Thames and Hudson.
COCKBURN, A. R. et al. 

COHEN, Abner 

CUQ, Joseph M. 

COQUERY-VIDROVITCH, Catherine 
1969 Recherche sur un mode de production africain. La Pensée 144: 61-78.

CURASSON, G. 
1932 Le Mouton au Soudan français. L’Union ovine coloniale.

CURTIN, Philip D. 
1975 Economic Change in Precolonial Africa. Univ. of Wisconsin Press.

DE LA RONCIÈRE, Ch. 
1925-27 La Découverte de l’Afrique au Moyen Age. La Société de Géographie d’Égypte, 3 vols.

DE MARÉES, Pieter 
1987 (1602) Description and Historical Account of the Gold Kingdom of Guinea. A. van Dantzig and Adam Jones, trans., Oxford U.P.

DEVISE, Jean 

DIETERLEN, Germaine 
1950 Essai sur la religion Bambara. P.U.F.

DOGGETT, H. 

DOUTRESSOULLE, G. 
1947 L’Élevage en Afrique Occidentale Française. Larose.

DRESCH, J. 

ENDREI, Walter 

FERNANDES, Valentim 
1951 (1506-1510) Description de la Côte occidentale d’Afrique (du Sénégal au Cap de Monte, Archipels). Th. Monod et al., trans., Centro de Estudos da Guine Portuguesa, n. 11.

FRANÇOIS, M. G. 
GALLAIS, Jean

GOMES, Diogo

GOODY, J. and T. H. MUSTAPHA

GRIEAULE, M. et G. DIETERLEN
1965 Le Renard pôle. Institut d'Ethnologie.

HACQUARD & Dupuis
1897 Manuel de la langue songay. Maisonneuve.

HARLAN, Jack R.

HARLAN, J. R. and Ann STEMLER

HENRY, Yves

HEUZY, J.-A.

HOLAS, B.
1957 Les Sénofo(y compris les Minianka). P.U.F.

HOPKINS, A. G.
1973 An Economic History of West Africa. Longman.

IZARD, Michel

JEAY, Anne-Marie

JOHNSON, Marion

Johnson, Richard

川田順造
1976 『無文字社会の歴史』岩波書店。
1981 『サバンナの手帳』新潮社。

KAWADA, Junzo

川田順造編
1987 『民族の世界史12、黒人アフリカの歴史』山川出版社。
LABOURET, H.  
LANGE, Dierk et Silvio BERTHOU  
LAUZANNE, Le Capitaine  
LÉON L’AFRICAIN, Jean  
LEVITZON, Nehemia  
LEVITZON, N. and J. F. P. HOPKINS  
1981 Corpus of Early Arabic Sources for West African History. Cambridge U.P.  
LEWICKI, Tadeusz  
LOMBARD, Maurice  
LOVEJOY, Paul E.  
MAGE, Eugène  
MAUNY, Raymond  
MCINTOSH, R. J. and S. K. MCINTOSH  
MONTEIL, Charles  
1927 Le Coton chez les Noirs. Larose.  
1930 Les Empires du Mali. Larose  
MUNSON, P. J.  
MURDOCK, George Peter  
NICOLAS, François-J.  
NORMAN, M. J. T. et al.  
1984 The Ecology of Tropical Food Crops. Cambridge U.P.  
PACHECO PEREIRA, Duatro  
PALMER, H. R.  
1928 Sudanese Memories. 3 vol., Government Printer.  
591
PAQUES, Viviana
1954 Les Bambara. P.U.F.

PAULME, Denise

PELISIER, Paul

PÉRSON, Yves

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul

PELISSIER, Paul
SERJEANT, R. B.
1972 Islamic Textiles. Librairie du Liban.

SHAW, Thustan

SKINNER, David E.

SMITH, Robert

TRICART, J.

TYMOWSKI, Michal

URVOY, Y.

VIGUIER, Pierre

VINCENT, Y.

VUILLET, J.

WATSON, Andrew M.

WILKS, Ivor

WINTZ, R. P. (ed.)